

リープ色細粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器等が出土している。4点(128~131)図化した。128は土師器小形壺の口縁部で1/4程度が残存している。口縁部の中位を強いヨコナデで調整することにより、二重口縁状を形成している。129は土師器壺である。器面の剥離が顕著で調整は不明瞭である。130は楕円形の杯部を有する高杯である。杯部と脚部との接合部付近に焼成前に棒状工具により穿たれた孔が1個存在する。131は須恵器の把手付椀である。体部外面上位から中位にかけての凸帯間に2条の波状文が施文されている他、中位より底部にかけては静止ヘラケズリが行なわれている。TK216型式に比定されよう。出土遺物の時期は、古墳時代中期前半(5世紀前半)が考えられる。

S K 31053 (第68・69図、図版三三四・五五)

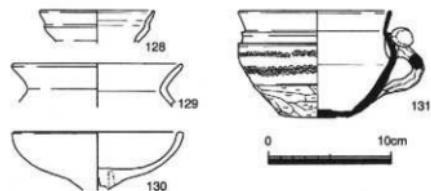
S K 31052の南部に近接する。円形状で、長径0.75m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。埋土は2層から成る。遺物は1層から平安時代後期の土師器、黒色土器が出土している。2点(132・133)を図化した。132は体部上半にヨコナデにより明瞭な稜を形成する土師器壺である。133は黒色土器A類椀である。深めの体部に「ハ」の字に開く高台が付くもので、高台部分は完存している。復元口径15.5cm、器高5.9cm、高台径7.7cmを測る。炭素付着は内面および外面体部上半におよぶ。遺物の時期は平安時代後期(10世紀後半~11世紀前半)に比定されることから、本来の構築面は第1~2面上層が想定される。

S K 31054

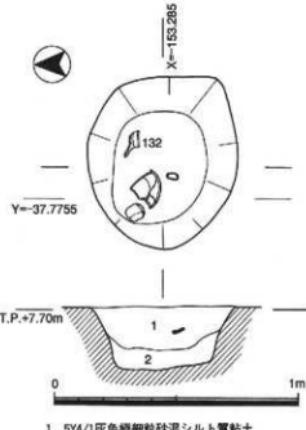
S K 31052の東部で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分では半円形を呈し、東西幅0.95m、南北幅0.45m、深さ0.04mを測る。埋土は黄灰色極細粒砂混



第66図 S K 31052平面図



第67図 S K 31052出土遺物実測図



第68図 S K 31053平面図

粘土質シルトの単一層である。遺物は古墳時代後期に比定される土師器の小片が極少量出土している。

S K 31055 (第70図)

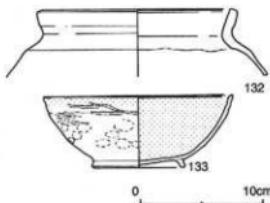
7調査区北西隅のⅧ-13-9D地区で検出した。S O 31004を切っている。北部および西部が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.9m、南北幅1.9m、深さ0.1mを測る。埋土は暗青灰色シルト質粘土の単一層である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器が出土している。2点(134・135)を図化した。134は楕円形の杯部を有する土師器高杯である。135は須恵器の無蓋高杯の小片である。古墳時代中期後半(5世紀後半)に比定されよう。

S K 31056

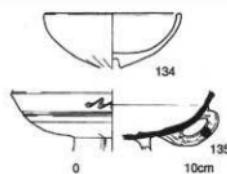
7調査区北西部のⅧ-13-9D地区で検出した。S O 31004の底部で検出した。東-西に長軸を持つ椭円形を呈するが、南側のラインは不明瞭である。長径0.9m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は上層が暗青灰色シルト質粘土、下層が暗青灰色極細粒砂である。遺物は出土していない。

S K 31057 (第71・72図、図版五 五・五六)

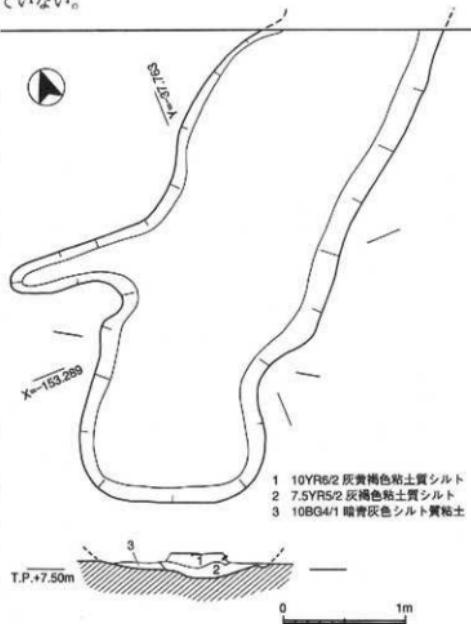
7調査区北西部のⅧ-13-9・10D地区で検出した。北東-北西に溝状に伸びるもので、北端は調査区外に至る。検出長3.8m、最大幅2.6m、深さ0.2mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器、製塩土器、土錐等が多量に出土している。16点(136~151)を図化した。土師器壺は5点(136~140)図化した。136が小形品、137・138が中形品、139・140が大形品の長胴壺に分類される。体部外面はハケメ、体部内面はナデおよびケズリ調整が行なわれているが、いずれも風化が顕著で器面調整が不明瞭なものが多い。色調は136~139が橙色、140が灰白色である。141は口縁部が小さく外反する土師器鉢である。1/2程度



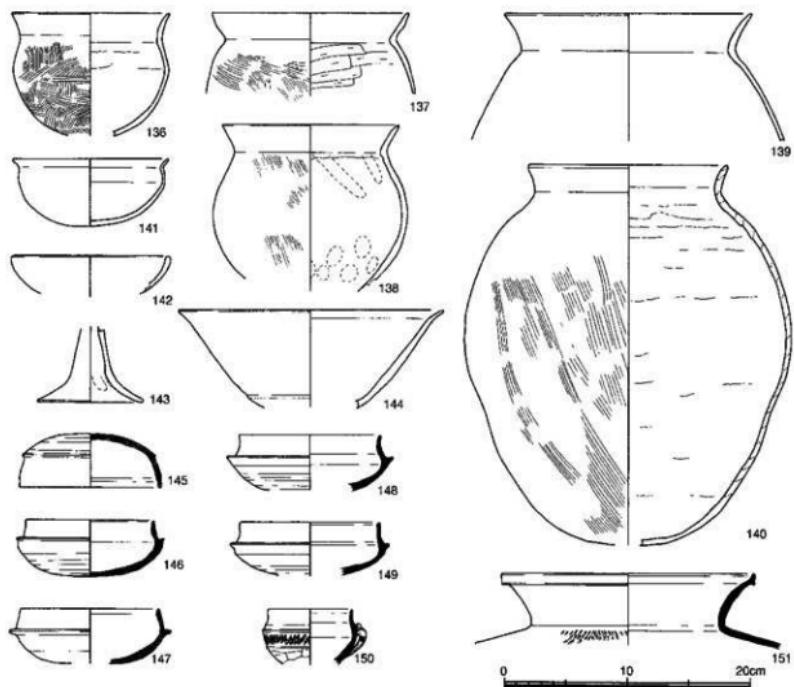
第69図 S K 31053出土遺物実測図



第70図 S K 31055出土遺物実測図



第71図 S K 31057平断面図



第72図 S K 31057出土遺物実測図

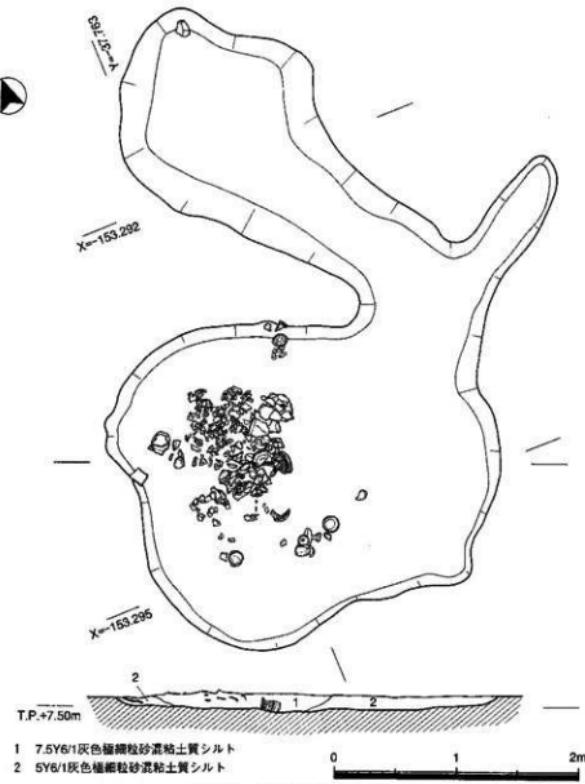
が残存している。142～144は土師器高杯で、楕形の杯部を有する小形の142・143と深い杯部を持つ大形の144がある。145は須恵器杯蓋で天井部が高く丸い。須恵器杯身は146が完形に近い他は、1/8～1/4程度が残存している。立ち上がりは、147以外は内傾後、直立して伸びるもので口縁端部が丸く終わる。ON46型式に比定されよう。150は小形の把手付楕である。体部外面上位の凸帯間に波状文、中位から底部に静止ヘラケズリが行なわれている。151は口縁端部が上下に肥厚する壺である。出土遺物は古墳時代中期中葉（5世紀中葉）の所産と考えられる。

S K 31058

7調査区北西部のⅦ-13-10D地区で検出した。北東-南西に溝状に伸びるもので、底部にはS P 31095・S P 31096が存在している。全長3.7m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする2層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

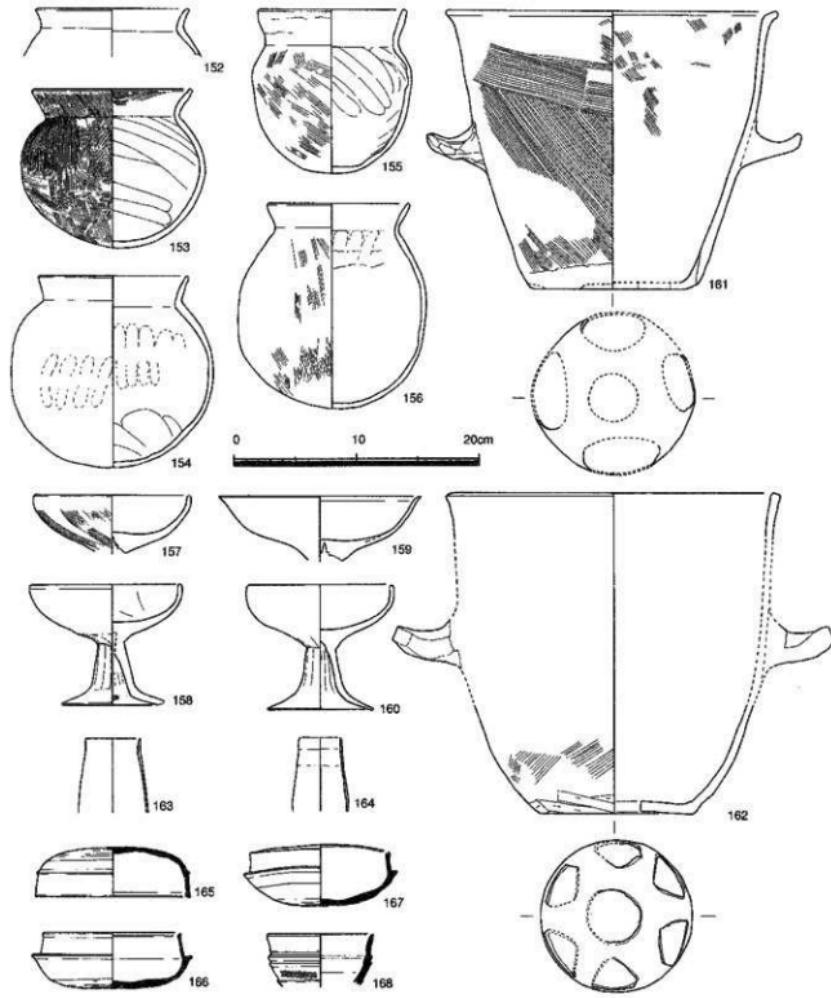
S K 31059（第73～76図、図版三五・五六・五七）

7調査区北西部のⅦ-13-10D・E地区で検出した。北部でS O 31004を切っている。平面形状は不定形である。全長5.3m、幅0.8～3.2m、深さは北部で0.26m、南部で0.1mを測る。埋土は、極細粒砂混粘土質シルトを主体とする2層で、層中に若干炭化物が混じる。遺物は特に南半分の



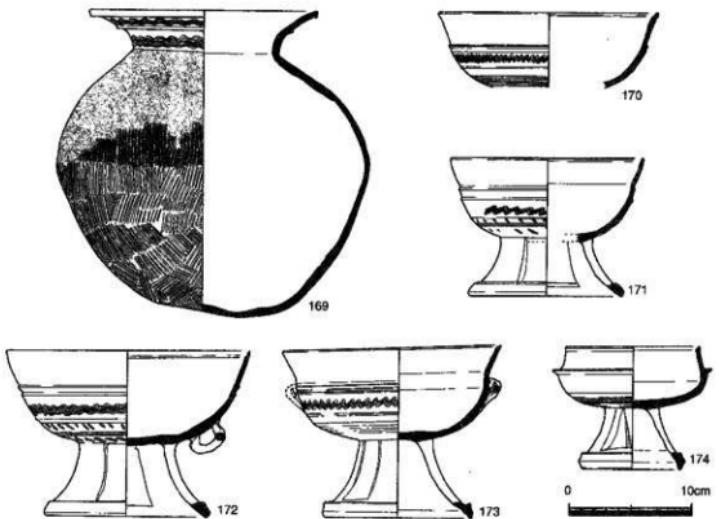
第73図 SK 31059平断面図

東西幅0.8m、南北幅1.0mの範囲で土器が集積した状態で検出されている。検出時の土器集積部分（小片が多い）を取り除くと下部から完形の土師器壺が2個体（153・154）出土している。遺物の出土状況や堆積状況などから判断すると短期間の内に埋没したとみられる。遺物は、土師器（壺・高杯・懸・須恵器（杯蓋・杯身・壺・壺・無蓋高杯・有蓋高杯）、製塩土器、動物遺体（馬歯）、双孔円板が出土した。24点（152～175）を図化した。152～156は土師器壺で、そのうちの153・154が完形品である。口径11.8～13.0cm、器高12.8～13.0cmを測る中形品である。体部が球形のもの153・154、体部最大径が上位にあるもの155、体部中位が直線的なもの156に区別される。157～160は土師器高杯で、杯部が楕形のもの157・158・160と杯部の口縁部が小さく外反する159がある。161・162は土師器の甌で、口縁部が外反する161と直口の162がある。把手は牛角状で162には上面からの切り込みがある。蒸気孔の数は161が5個、162が7個である。163・164は薄手丸底式の製塩土器である。165は須恵器杯蓋で、残存率は1/2程度である。166・167は須恵器杯



第74図 SK 31059出土遺物実測図その1

身で167は完形品である。167は焼成時に歪みを生じている。165～167はTK208型式に比定される。168は須恵器把手付椀の口縁部と推定される。169は須恵器壺である。口縁部外面中位の内帶の上下に波状文が施されている。体部外面は全体にタタキ調整が施されているが、上半は灰かぶりのため観察が困難である。170～174は須恵器高杯で、174が有蓋高杯、170～173が無蓋高杯



第75図 S K 31059出土遺物実測図その2

である。無蓋高杯の裾部断面の形状は丸く終わる171・172と上下に肥厚する173がある。前者がTK216型式、後者がTK208型式に比定されよう。174は有蓋高杯である。TK208型式である。175は滑石製の双孔円板である。平面形状が隅丸方形で長辺1.9cm、短辺1.7cm、厚さ3mmを測る。側縁の対になる位置に径1mm程度の孔が2個穿たれている。出土遺物の時期は、須恵器の特徴から古墳時代中期前半～中葉（5世紀前半～中葉）とみられる。

S K 31060

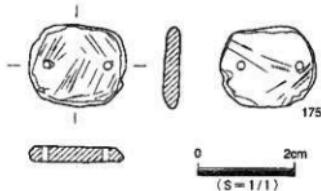
7調査区西部のVII-13-10D地区で検出した。S O 31005を切る関係にある。南西-北東に長軸を持つ楕円形で、長径2.0m、短径1.6m、深さ0.18mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする3層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

S K 31061

7調査区南西隅のVII-13-10D、VII-18-1D地区で検出した。S O 31005の底部に構築されたもので、南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.3m、南北幅1.4m、深さ0.25mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31062

S K 31060の東約1.1mで検出した。円形を呈するもので、長径1.1m、短径1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。



第76図 S K 31059出土遺物実測図その3

S K 31063

S K 31062の東に隣接して検出された。東一西に長軸を持つ楕円形を呈するもので、長径2.4m、短径1.4m、深さ0.12mを測る。埋土は明オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31064

7調査区北部のⅦ-13-10E地区で検出した。東一西に溝状に伸びるもので、東端は調査区外に至る。底にS P 31104が存在する。検出部分で東西幅5.1m、南北幅1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は明オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31065

S K 31064の南に隣接している。南一北に溝状にのびるもので、東西幅0.4m、南北幅1.4m、深さ0.08mを測る。埋土は明オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31066

S K 31064の南東に隣接している。不定形を呈するもので、東端はS P 31110に切られている。東西幅2.5m、南北幅1.1m、深さ0.12mを測る。埋土は明オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31067

S K 31066の東に隣接している。南一北に溝状に伸びるもので、南北長1.2m、東西幅0.4m、深さ0.08mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

S K 31068

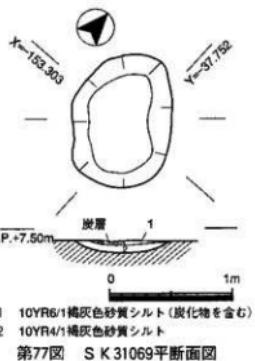
S K 31067の南に隣接している。東一西に溝状に伸びるもので、東西長1.4m、南北幅0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は明オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31069 (第77・78図、図版五七)

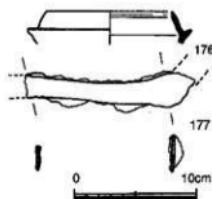
7調査区中央部のⅦ-18-1E地区で検出した。楕円形を呈するもので、長辺1.05m、短辺0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は2層で、上層の1層には炭化物が薄く堆積している。出土遺物は、古墳時代後期前半（6世紀前半）に比定される土師器、須恵器杯身の小片の他、鉄製品等が出土している。176は須恵器杯身の小片である。177は鉄製鎌と推定されるもので、中央部の南よりで出土した。鎌は、現存長13.6cm、幅1.5~2.6cm、厚さ0.3cmでやや弓なりに曲がっている。

S K 31070 (第79・80図、図版三六・五八)

7調査区北部のⅦ-13-10F地区で検出した。北端は調査区外に至る。南東一北西に伸びる溝状のもので、南東端の掘方ラインは2段になっている。検出部分で検出長4.3m、幅1.4mを



1 10YR6/1褐色砂質シルト(炭化物を含む)
2 10YR4/1褐色砂質シルト
第77図 S K 31069断面図



第78図 S K 31069出土遺物
実測図

測る。断面形状は、浅い皿形を呈し深さ0.22mを測る。埋土は灰色細粒砂混シルト質粘土の単一層で、中央付近から東西1.5m、南北0.8mの範囲で炭化物の広がりを確認した。遺物は炭化物が堆積している部分を中心に古墳時代後期前半に比定される完形の須恵器の杯身(183)が立位の状態で出土している。その他、土師器碗・高杯・把手付鉢等が出土している。7点(178~184)を図化した。178は土師器碗である。179は無縁で口縁部が外反する杯部を有する土師器高杯である。180は把手部分が欠損するが、おそらく平底を有する把手付鉢と推定される。181は須恵器杯蓋、182~184は須恵器杯身である。須恵器類はMT15型式(6世紀前半)に比定される。

S K 31071

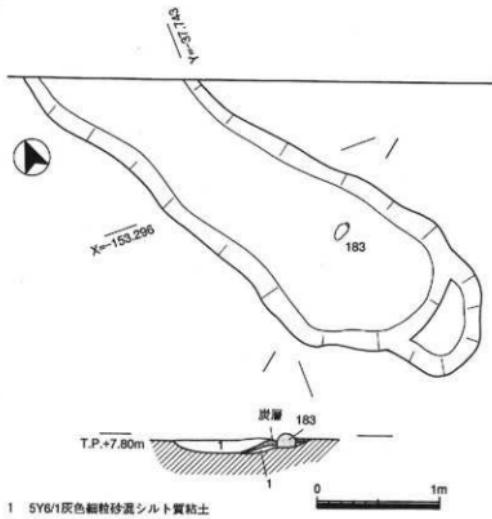
S K 31070の東部で検出した。不整円形を呈するもので、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.35mを測る。埋土は4層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

S K 31072

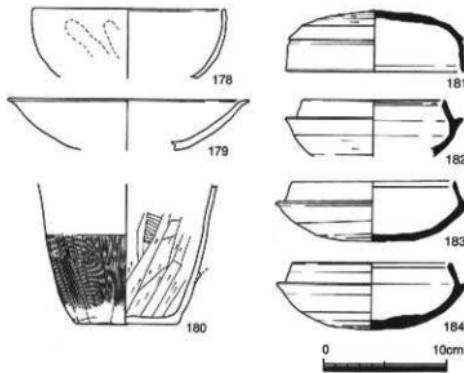
7調査区のVII-13-10F地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.5m、南北幅0.7m、深さ0.23mを測る。埋土は灰色極細粒砂混粘土質シルトである。遺物は古墳時代中期~後期に比定される須恵器の小片が1点出土している。

S K 31073

S K 31071の南東側に隣接する。円形を呈するもので、径0.8mを測る。埋土は上層が灰色極細粒砂混粘土質シルト、下層がオリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトである。遺物は古墳時代中期



第79図 S K 31070平面図



第80図 S K 31070出土遺物実測図

に比定される土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

S K 31074

7調査区のⅦ-13-10G地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.0m、南北幅0.3m、深さ0.14mを測る。埋土は明オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S K 31075

7調査区のⅦ-13-10G地区で検出した。円形を呈するもので、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.13mを測る。埋土は灰色シルト質粘土の單一層である。遺物は出土していない。

S K 31076

S K 31075の南に近接している。椭円形を呈するもので、長径0.8m、短径0.5m、深さ0.17mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

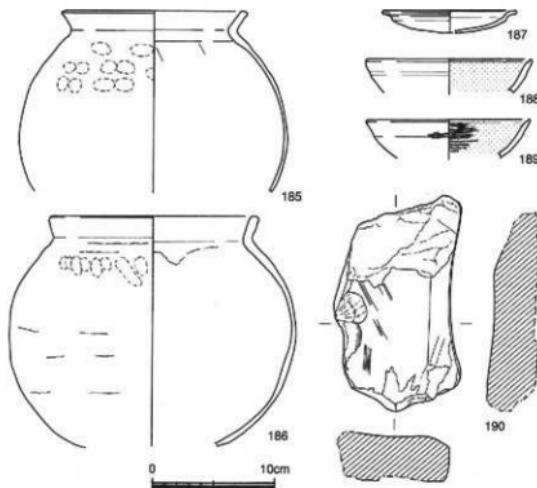
S K 31077

7調査区東部のⅦ-18-1G地区で検出した。不定形を呈しており、東西幅1.2m、南北幅1.5m、深さ0.13mを測る。埋土は2層で、炭化物を多く含む粘土質シルトが水平に堆積している。遺物は、古墳時代後

期に比定される土師器、須恵器の小片が出土した他、動物遺体（馬歯）が点在して出土したが、図化できたものはない。



第81図 S K 31078平断面図



第82図 S K 31078出土遺物実測図

S K 31078 (第81・82図、図版三六・五八)

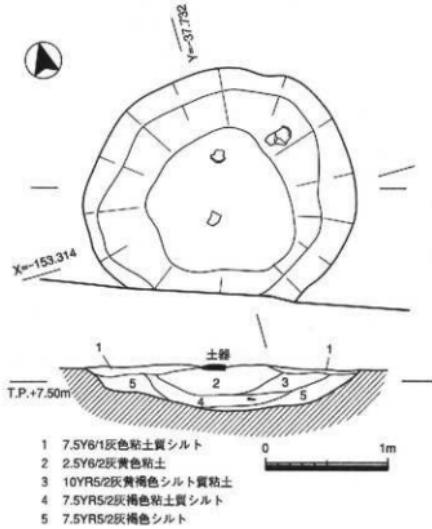
7調査区南東部のⅦ-18-1 F・G地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.4m、南北幅0.9mを測る。断面形状は逆台形で深さ0.18mを測る。埋土は細粒砂混じりのシルト質粘土の単一層である。遺物は炭化物が多く混じった中央部の北より部分で、土師器、黒色土器、砥石等が出土した。6点(185~190)を図化した。185・186は土師器甕である。186は底部を欠く以外は完存している。共に球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く。187は「て」の字状口縁を呈する土師器小皿である。188・189は黒色土器A類椀の小片である。188の口縁部端部内面に沈線が廻る。190は砥石で、上面と側面の2面に使用痕がある。材質は砂岩である。出土した遺物の帰属時期は、平安時代中期(10世紀後半)に比定される。

S K 31079 (第83・84図、図版五八)

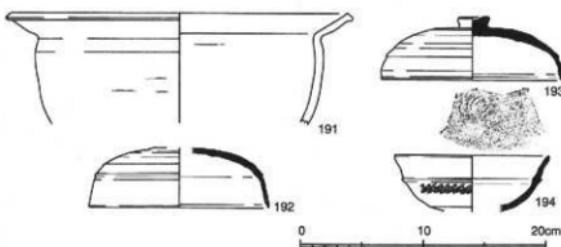
7調査区南東部のⅦ-18-2 G地区で検出した。南部は調査区外に至る。円形を呈するもので、検出部分で東西幅2.2m、南北幅2.0mを測る。断面形状は、浅い楕形で深さ0.37mを測る。埋土は粘土質シルトを中心に5層で構成され、それらがレンズ状に堆積している。遺物は土師器、須恵器(杯蓋・甕・有蓋高杯・無蓋高杯)が出土している。4点(191~194)を図化した。191は土師器鉢である。大形鉢で、復元口径27.6cmを測る。192は須恵器杯蓋。193是有蓋高杯の蓋で、天井部分中央の内面に同心円タタキが認められる。194は無蓋高杯である。須恵器類は3点とともにMT15型式に比定される。出土遺物の帰属時期としては、古墳時代後期前半(6世紀前半)が考えられる。

S K 31080

7調査区の北東部で検出した。梢円形で、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色細粒砂混シルト質粘土の単一層である。遺物は古墳時代後期に比定される土師器、製塩土器の小片が極少量出土している。



第83図 S K 31079平面図



第84図 S K 31079出土遺物実測図

S K 31081 (第85・87図、図版三七・五八)

8調査区南西部のⅧ-18-2 H地区で検出した。不整円形を呈するもので、長径1.7m、短径1.5mを測る。断面形状は二段掘方を呈するもので深さ0.66mを測る。埋土は3層がほぼ水平に堆積している。1層の中央部において、韓式系土器2個(195・196)が横位に埋置された状態で出土している。韓式系土器は、2個とも倒卵形を呈する長胴甕で完形に復元が可能である。195は口径17.1cm、器高30.4cm、体部最大径24.4cmを測る。196は口径18.1cm、器高34.4cm、体部最大径28.7cmを測る。195・196共に体部外面に繩文タタキが施されている。時期的には、古墳時代中期中葉(5世紀中葉)の所産と考えられる。

S K 31082 (第86・87図、図版三八)

S K 31081の北東部で検出した。隅丸方形を呈するもので、一辺1.4mを測る。断面形状は逆蒲鉾状で深さ0.39mを測る。

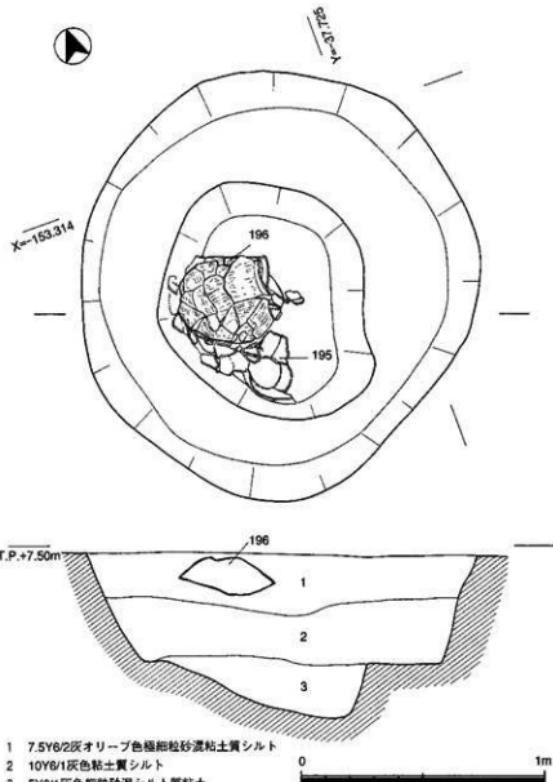
埋土は2層で1層が灰オリーブ色極細粒砂混粘土質シルト、2層が灰色粘土質シルトである。遺物は古墳時代中期前半(5世紀前半)に比定される須恵器甕の小片が出土している。須恵器甕1点(197)を図化した。口縁端部直下に1条の凸帯があるものである。T K73型式(5世紀前半)に比定される。

S K 31083

S K 31082の南東に近接する。円形を呈するもので、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.54mを測る。埋土は4層から成る。遺物は出土していない。

S K 31084

8調査区南西部のⅧ-18-2 H地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分では方形を呈し、東西幅3.9m、南北幅1.0mを測る。底面はほぼ水



第85図 S K 31081平断面図

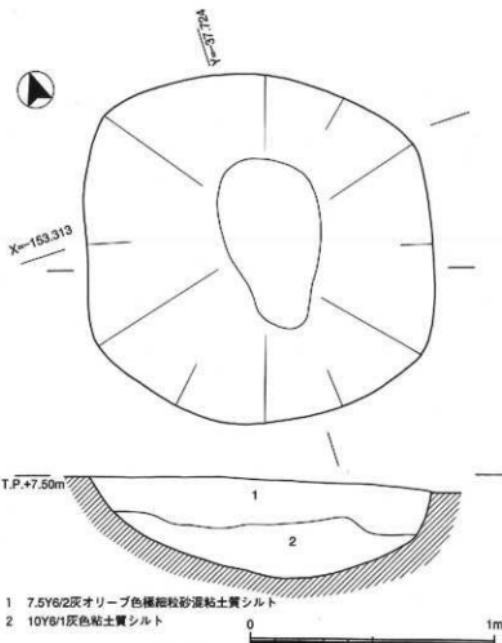
平で深さ0.15mを測る。埋土は灰オリーブ色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

S K 31085

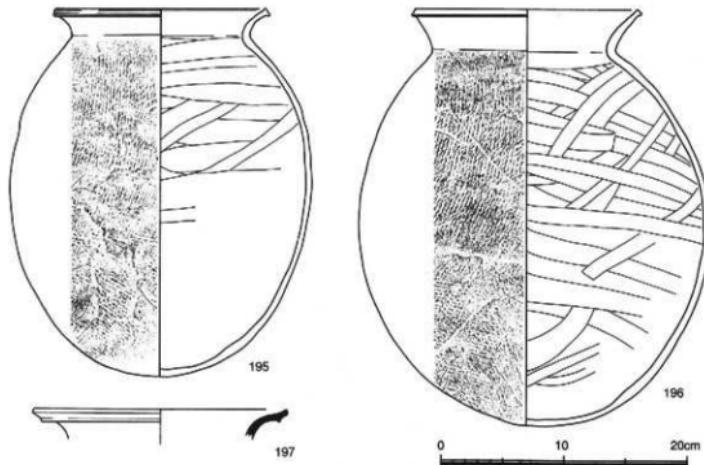
8調査区南西部のⅧ-18-2 I地区で検出した。円形を呈するもので、径0.8m、深さ0.09mを測る。埋土は浅い皿状の形状に沿って粘土質シルトを主体とする2層が堆積している。遺物は出土していない。

S K 31086

8調査区北部のⅧ-18-1 J地区で検出した。南-北に長軸を持つ楕円形で、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.13mを測る。埋土は灰黄色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。



第86図 S K 31082平面面図



第87図 S K 31081 (195 + 196)、S K 31082 (197) 出土遺物実測図

落ち込み (S O)

S O31001 (第88・89図、図版三八・五九)

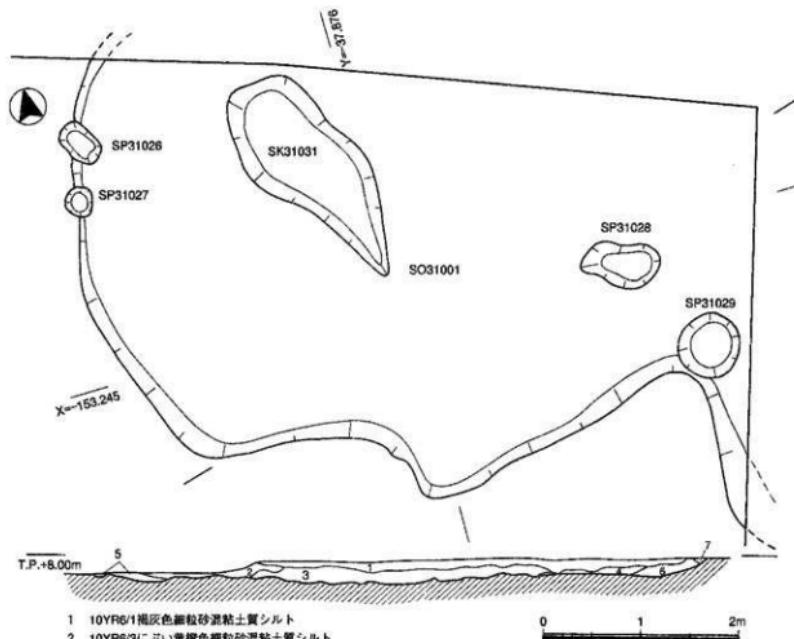
4調査区北東隅のⅦ-12-5C地区で検出した。掘方の平面形状が不定形な落ち込みで、北部および東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅6.5m、南北幅2.8m、深さ0.25mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は7層から成る。底面ではSK31031・SP31026～SP31029が検出された。遺物は古墳時代中期の土器類が出土している。須恵器器台1点(198)を図化した。198は小形の器台で脚部高9.0cm、裾部径15.8cmを測る。初期須恵器の範疇に含まれるものと考えられるが、型式は限定し難い。

S O31002 (第90・91図、図版三九)

6調査区のⅦ-12-9J、Ⅶ-13-9A地区で検出した。一部、小穴・溝・攢乱で切られ、南端は、調査区外に至る。検出部分で東西幅8.5m、南北幅5.8m、深さ0.2mを測る。底面は北から

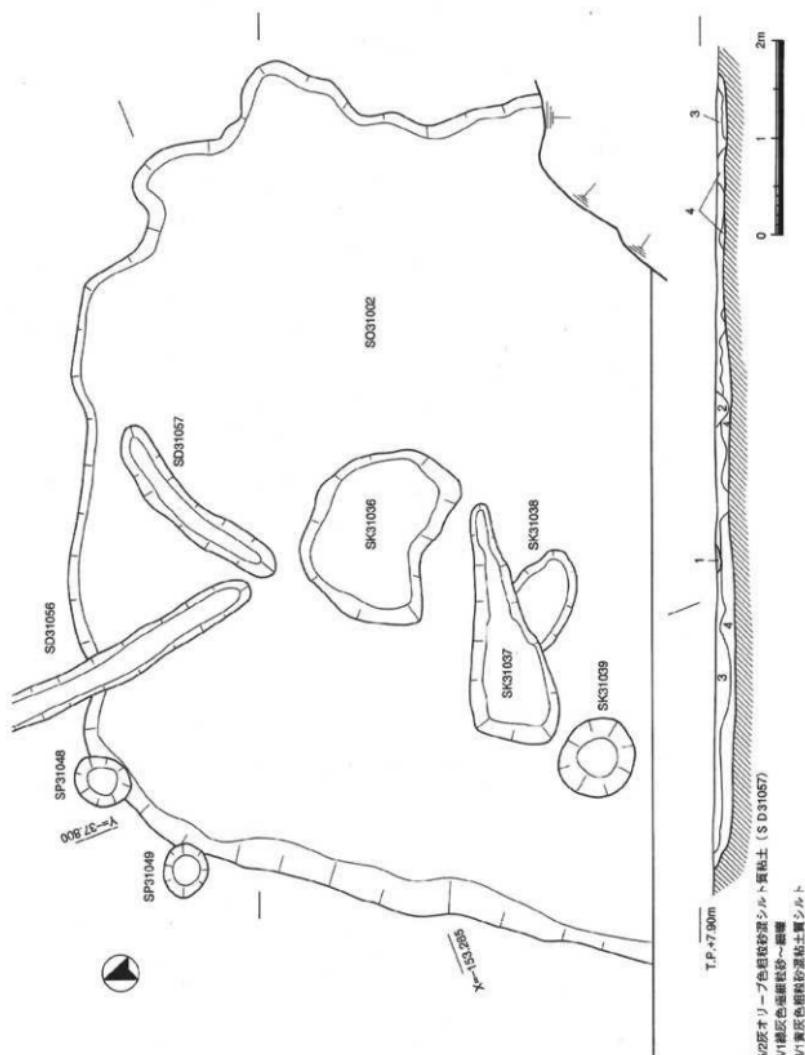


第88図 S O31001出土遺物
実測図



- 1 10YR6/1褐色細粒砂混粘土質シルト
- 2 10YR6/3にびい黄褐色細粒砂混粘土質シルト
- 3 10YR6/3にびい黄褐色細粒砂混粘土質シルト(2層より細粒多い)
- 4 7.5YR6/2灰褐色細粒砂混粘土質シルト
- 5 10YR6/2灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
- 6 10YR6/1褐色細粒砂～小礫混シルト
- 7 7.5YR6/2灰褐色細粒砂混粘土質シルト

第89図 S O31001平断面図

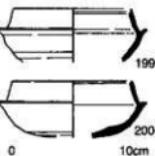


第90図 S O 31002平断面図

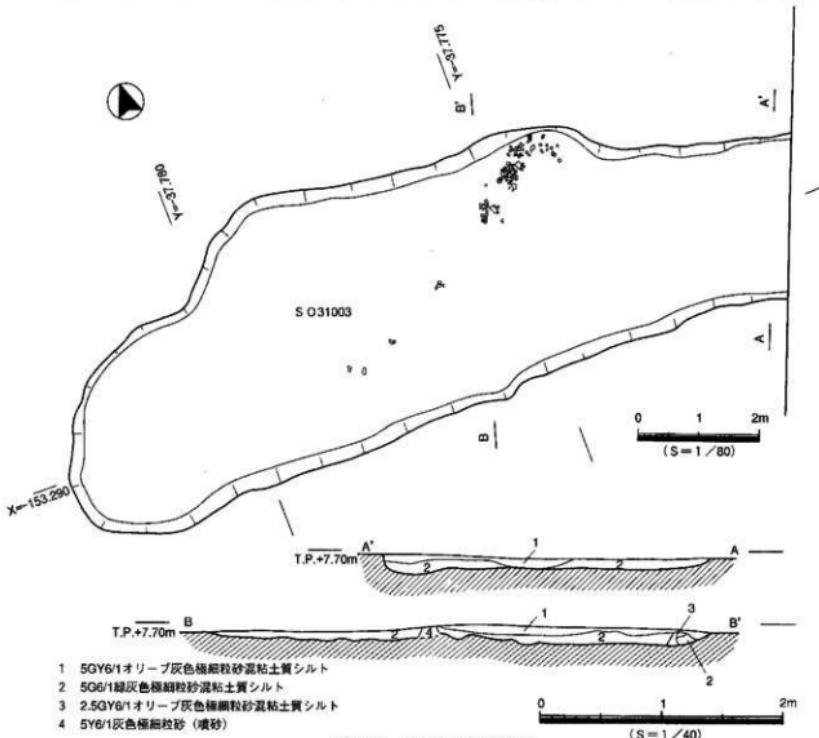
南にかけて傾斜している。埋土は3層で極粗粒砂～細礫を多く含む粘土質シルト層である。遺物は土師器、須恵器杯身、製塙土器が出土した。須恵器杯身2点(199・200)を図化した。共に小片で残存率は1/4以下である。TK23型式にあたる。出土遺物から遺構の帰属時期は、古墳時代中期後半(5世紀後半)に比定される。

S O31003 (第92・93図、図版三九・五九)

6調査区のⅧ-13-9-10B・C地区で検出した。東～西に溝状に展開するもので、検出部分で、長さ12.9m、幅2.5～4.5mを測る。深さは0.2m前後で、底面は西から東に傾斜している。東側に隣接する7調査区のS O31004に対応するものと考えられる。埋土は4層で、そのうちの2層は緑灰色極細粒砂混粘土質シルトで炭を多く含む。中央北より土器小片の集積がみられ、この部分から多量に遺物が出土している。出土遺物には、土師器高杯、須恵器蓋杯・無蓋高杯・有蓋高杯、土錐などがある。そのうち10点(201～210)を図化した。201は土師器壺である。小片であるが長胴壺になるものと考えられる。全体に

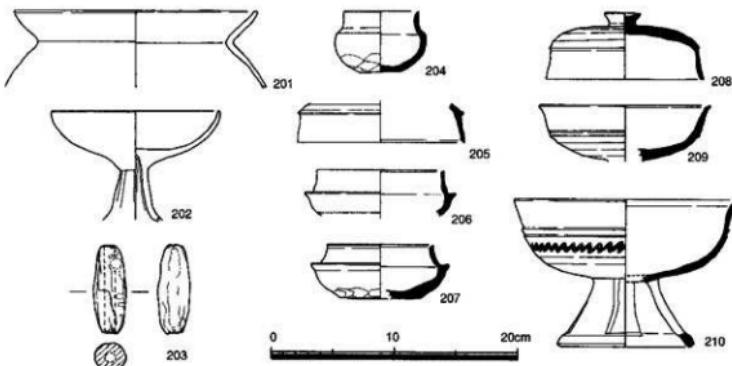


第91図 S O31002出土遺物実測図



第92図 S O31003断面図

器面が剥離しており調整は不明瞭である。202は楕形の杯部を有する土師器高杯である。橙色系の明るい色調を呈している。203は土師器土錐である。完形品で長さ7.2cm、最大幅2.7cmを測る。表面の指頭圧痕が顯著でやや雑な作りである。204は須恵器の小形壺である。体部下半に静止ヘラケズリが行なわれている。205は須恵器杯蓋の小片。206・207は須恵器杯身である。207は平底で、体底部の器壁が厚く体部下半に静止ヘラケズリが行なわれている。TK85型式に類似が認められる。208は有蓋高杯の蓋である。TK208型式に比定される。無蓋高杯は2点(209・210)で脚部に透孔を有する210と無い209がある。2点ともにON46型式に比定される。出土遺物からみて造構の帰属時期は、古墳時代中期中葉(5世紀中葉)が想定される。



第93図 S O 31003出土遺物実測図

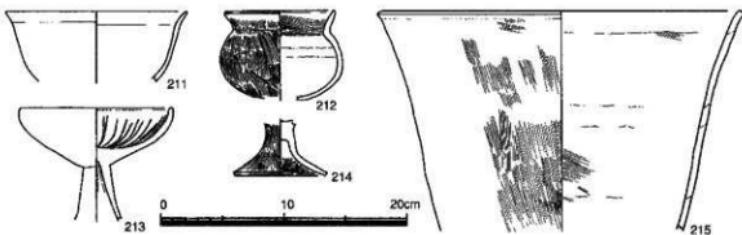
S O 31004 (第94図)

7調査区西北部のⅦ-13-9・10D・E地区で検出した。SK31055・SK31057・SK31059に切られている。平面形状は、不定形を呈しており、北・西側は調査区外に至る。検出部分で東西幅10.5m、南北幅5.5m、深さ0.2mを測る。隣接する6調査区のS O 31003に対応するものとみられる。埋土は2層で水平に堆積する極細粒砂混粘土質シルトである。断面形状は、浅いU字形をしている。埋土内からは、古墳時代とみられる土師器・須恵器の小片が少量出土している。土師器鉢1点(211)を図化した。211は口縁部が小さく外反する小形鉢である。内外面ともに器面の風化のため調整は不明瞭である。出土遺物からみて造構の帰属時期は、古墳時代中期中葉(5世紀中葉)が推定される。

S O 31005 (第94図、図版五九)

7調査区西半のⅦ-13-10C・D・E・F、Ⅶ-18-1D・E地区で検出した。調査区内で東西20.0m、南北12.5mの範囲に広がっている。深さは、0.1~0.4mを測る。平面形状は、S O 31004と同様に入りくんでおり、東端の掘方ラインは、検出できなかった。なお、西部については、6調査区のSD31062・SD31063に対応する可能性がある。埋土は極細粒砂混シルト質粘土の6層である。断面形状は、U字形で西側にいくほど深くなっている。埋土内からは、古墳時代中期中葉~後半(5世紀中葉~後半)に比定される土師器壺・高杯・瓶、須恵器の小片

が出土した。土器器4点(212~215)を図化した。212は小形壺で体部最大径が口径を凌駕している。体部全面と口縁部内面に単位の細かいハケ調整が行なわれている。213は楕円形の杯部を有する高杯。214は小形高杯で脚部は完存している。裾部径7.4cm、脚部高4.5cmを測る。212と同様、細かい単位のハケ調整が行なわれている。なお、212の小形壺と213の土器器高杯はS P 31113の西側付近で共に逆位の状態で重なって出土した。215は壺で体部外面には垂直方向にハケ調整が行なわれている。出土遺物からみて造構の帰属時期は古墳時代中期中葉~後半(5世紀中葉~後半)が考えられる。



第94図 S O31004 (211)、S O31005 (212~215) 出土遺物実測図

溝 (S D)

S D 31001

1調査区南西部のVI-15-1 I地区で検出した。東~西に伸びるもので、西側が調査区外に至る。検出長2.3m、幅1.3m、深さ0.12mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 31002

1調査区南西部のVI-15-1 I・J地区で検出した。S D 31001と並行して、東~西に伸びるもので、西側が調査区外に至る。検出長10.5m、幅約1.5m、深さ0.07mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘土質シルトと黄灰色極細粒砂混シルトである。検出面の直上は耕作土で、全体に削平されているとみられるが、本来は後述するS D 31006と同一の可能性がある。遺物は出土していない。

S D 31003

1調査区北西部のVI-10-10 I・J、VI-15-1 J地区で検出した。北西~南東に伸びる溝で、北部で緩やかな逆くの字形を呈する。S D 31004に切られ、また北西側が削平されている。検出長6.1m、幅0.6m、深さ0.11mを測る。断面はレンズ状で2層から成り、下層に炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

S D 31004

1調査区のVI-10-10 I・J、VI-15-1 I地区で検出した。S D 31003を切っている。北東~南西に伸びる溝で、南端部分でL字形を呈する。北東側が調査区外に至る。検出長9m、幅0.4m、深さ0.11mを測る。断面レンズ状で、埋土は灰色極細粒砂混粘土と灰黄褐色極細粒砂混粘土の2層から成る。遺物は出土していない。

S D 31005

1 調査区のVI-15-1 J 地区とVII-11-1 A 地区にまたがり、東一西に伸びる。全長9m、幅はくびれ部で約0.35m、東端で1mを測る。断面は浅い逆台形を呈し、埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

S D 31006

1 調査区のVI-15-1・2 J、VII-11-1・2 A 地区で検出した。中央部でくびれる形態を示すが、削平が著しく、また東側が排水管で切られている。検出長は東西約6m、南北3m、深さ0.15mを測る。埋土は炭化物を含む3層から成る。遺物は出土していない。

S D 31007

1 調査区のVI-15-2 J、VII-11-1・2 A 地区で検出した。南一北に伸びる溝で、南側でやや幅が細くなる。北側はS E 21001と排水管に切られ、南側は調査区外に伸びる。検出長12.5m、幅0.7~0.2m、深さ0.1mを測る。断面レンズ状で、埋土はシルト質粘土を主体とする2層から成る。遺物は出土していない。

S D 31008

1 調査区のVII-11-1 B 地区で検出した。南一北に伸びる溝で、S D 31009とT字形につながっている。南端をS D 31010に切られている。検出長4.6m、幅0.4m、深さ0.04mを測る。断面は浅いレンズ状で、埋土は炭化物を少量含む暗オリーブ褐色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S D 31009

1 調査区のVII-11-1 B 地区で検出した。東一西に伸びる溝で、S D 31008にT字形に接続する。S D 31010・S D 31011に切られている。検出長3.8m、幅0.35m、深さ0.04mを測る。断面は浅いレンズ状で、埋土は暗オリーブ褐色粘土を含む暗灰黄色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S D 31010

1 調査区のVII-11-1・2 B 地区で検出した。南一北に伸びるもので、S D 21006の下部にある。調査区外にのびるため全容は不明であるが、検出長12.5m、幅0.9m、深さ0.36~0.41mを測り、南側がやや深くなる。断面逆台形状で、埋土は3層に分けられ、中層に極細粒砂がラミナ状にみられる。遺物は土師器の小片が少量出土している。

S D 31011

1 調査区の北東部から2調査区の南西部にかけて南一北に伸びる溝で、S D 31009を切り、S D 31010と並行関係にある。両端は調査区外に至るが検出長18.2m、幅約0.9m、深さ0.3mを測る。断面逆台形状で、埋土は6層に分けられ、上部層には極細粒砂～細粒砂が、下部層には炭化物や酸化鉄分を含むシルト質粘土が堆積している。遺物は出土していない。

S D 31012 (図版四〇)

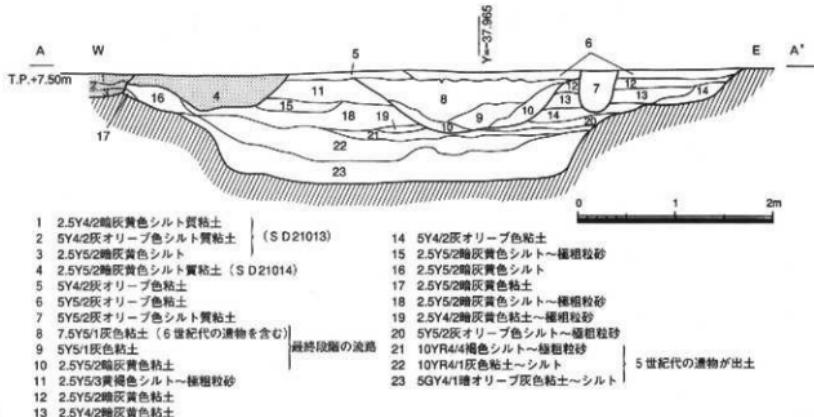
S D 31011の東側約5mで検出した。南南西一北北東に流路を持つもので、北端部分が、S D 31013に切られている。検出長17m、幅1.9m、深さ0.61mを測る。埋土はV字形を呈する断面形状に沿って8層が漸次堆積している。遺物は土師器、須恵器、陶器、平瓦の小片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

S D 31013 (図版四〇)

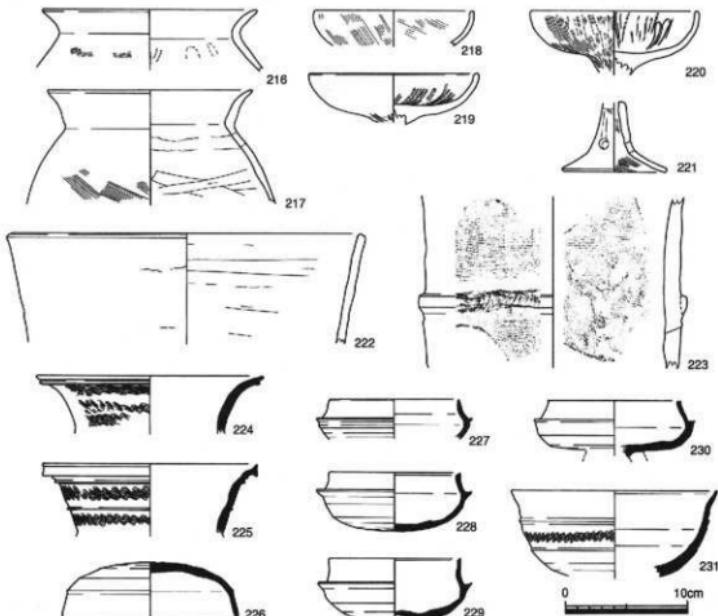
2 調査区北西部のⅧ-11-1・2 C 地区で検出した。南東一北西に伸びるもので、S D 31012 の北端を切っている。検出長6.2m、幅0.5m前後、深さ0.27mを測る。埋土はU字形の断面形状に沿って4層が堆積している。遺物は出土していない。

S D 31014 (第95・96図、図版四〇・六〇)

S D 31012の東側約6.0mで検出した。南南西一北北東に伸びるもので、検出長17.2m、幅6.3~7.2m、深さ1.13mを測る。断面の形状は二段掘方で、特に東側面にはテラス状の平坦面が存在しており、北部東側面の下部付近からは流路方向に直行する杭列が検出されている。埋土は19層に分層が可能で、下層から中層にかけては断面形状に沿ってほぼ水平な堆積状況を示すものの、上層においては、溝状構造の痕跡を残す堆積状況(8~10層)が窺われ、規模を縮小するものの溝としての機能が残されていたようである。遺物は14層~23層で5世紀中葉~後半の土器器壺・高杯・瓶・須恵器杯身・壺・高杯、円筒埴輪片が出土した他、8~10層の最終段階の溝部分からは6世紀中頃の須恵器杯身が出土している。16点(216~231)を図化した。216・217は土師器長胴壺の小片である。218~221はやや浅い椀形の杯部を有する土師器高杯である。5世紀後半の所産である。222は直口の口縁部を有する壺の小片である。胎土中に角閃石を含み褐灰色の色調を呈する。223は円筒埴輪片である。タガはやや低い台形でスカシ孔は円形である。B種ヨコハケによる器面調整が行なわれており無黒斑である。川西編年のIV期(5世紀中葉~後期)にあたる。224・225は須恵器壺で、224がO N46型式、225がT K208型式に比定される。226は須恵器杯蓋である。MT 15型式にあたる。227~229は須恵器杯身である。228がほぼ完形である。227がT K10型式、228がT K23型式、229がT K208型式にあたる。230は須恵器有蓋高杯で、T K23型式にあたる。231は無蓋高杯の杯部で、T K208型式にあたる。出土遺物は古墳時代中期中葉~後半(5世紀中葉~後半)にかけての遺物が大半で、一部含まれている古墳時代後期中葉(6世紀中葉)の遺物は埋没の最終段階に伴う遺物である。



第95図 S D 31014断面図



第96図 S D 31014出土遺物実測図

S D 31015

2 調査区のⅦ-11-2~4 E 地区で検出した。南一北に伸びるもので、S D 31017の西端を切る他、南部は近代の搅乱により削平を受けている。検出長17.9m、幅0.6~1.0m、深さ0.52mを測る。埋土はU字形を呈する断面形状に沿って8層がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

S D 31016

2 調査区北東部のⅦ-11-2 E 地区で検出した。東一西に伸びるもので、全長3.2m、幅0.24m、深さ0.08mを測る。埋土は暗灰黄色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

S D 31017

S D 31016の南側約2.1mで検出した。S D 31016にはば並行して伸びるもので、東部がS D 31018、西部がS D 31015・S D 31019に切られている。埋土はV字形を呈する断面形状に沿って2層が堆積している。遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土している。

S D 31018

2 調査区の東部で検出した。南南西一北北東に伸びるもので、S K 31009、S D 31017を切りS K 31007に切られている。検出長17.5m、幅1.3~1.7m、深さ0.2mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質粘土の単一層である。遺物は6世紀前半に比定される土師器高杯、須恵器壺・杯身等の小片が少量出土している。本来の構築面は第IV層上面である。

S D 31019

S D 31018の東側に並行して伸びる。検出長7.0m、幅0.2~0.46m、深さ0.07mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代中期後半に比定される土師器壺・高杯、須恵器大形壺、製壺土器の小片が少量出土している。

S D 31020

S D 31019の東側に並行して伸びる。検出長9.7m、幅1.4m、深さ0.18mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は粘土およびシルト質粘土が優勢な3層が堆積している。遺物は6世紀後半に比定される土師器片、須恵器杯身等の小片が極少量出土している。

S D 31021

3調査区のⅧ-11-2~4F・G地区で検出した。南一北に伸びる溝である。遺構の北端と南端が調査区外に至る。検出長18.5m、幅1.35~2.9mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さ0.17~0.25mを測る。埋土はシルトが中心で、それがレンズ状に堆積する。埋土内からは、土師器や須恵器が出土したがいずれも細片で時期を決定するには至らない。

S D 31022 (図版97図、図版四〇・六〇)

3調査区のⅧ-11-3G地区で検出した。平面形状が逆L字形を呈する溝である。一部はS D 31021・S D 31023に切られている。検出長9.0m、幅0.7m前後を測る。断面形状は浅い半円形を呈し、深さは0.06mを測る。埋土は灰色粘土質シルトの單一層である。埋土内からは、古墳時代中期に比定される土師器、須恵器類が少量出土した。須恵器杯身1点(232)を図化した。完形品で口径9.8cm、受部径11.6cm、器高5.0cmを測る。楕円形の体部上半に小さく張り出す受部が付く。外面調整は体部中位以下に静止ヘラケズリが行なわれている他、体部下半から底部にかけて格子状のタキギが認められる。T K85型式に比定される。出土遺物からみて遺構の帰属時期は古墳時代中期前半(5世紀前半)が考えられる。

S D 31023 (図版四〇)

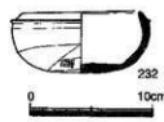
S D 31021の東側約0.5mの間隔を空けて並行に伸びる溝である。S D 31022・S D 31027の一部を切っている。遺構の南部分は調査区外に至る。検出長16.5m、幅0.62~0.78mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さ0.05~0.15mを測る。埋土は粘土・粘土質シルトを中心に構成されており、レンズ状の堆積を呈する。埋土から土師器や須恵器の細片が出土した。その内、器種の判明したものは須恵器杯蓋でT K47型式(5世紀後半)に比定される。

S D 31024 (図版四〇)

3調査区のⅧ-11-3G地区で検出した。南一北に伸びる溝である。全長3.8m、幅0.79mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さは0.09m前後を測る。埋土は暗灰黄色中疊混粘土質シルトの単一層である。埋土内からは、6世紀初頭~前半に比定される土師器や須恵器の細片が少量出土した。

S D 31025 (図版四〇)

S D 31024の東側約0.2mの地点で検出した。南一北に伸びる溝で、全長2.4m、幅0.45mを測る。遺構断面は浅い皿形を呈し、深さ0.05mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単一層である。遺物は出土していない。



第97図 S D 31022出土
遺物実測図

S D 31026

S D 31025の東側約0.2mの地点で検出した。南一北に伸びる溝である。遺構の北部が調査区外に至る。検出長7.4m、幅0.45~1.5mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さは0.1mを測る。埋土は上から暗灰黄色中粒砂混粘土シルト、灰黄褐色シルトがレンズ状に堆積している。遺構内から土師器細片が少量出土した。

S D 31027 (図版四〇)

3調査区のⅧ-11-3 G地区で検出した東一西に直線的に伸びる。遺構の東端をS D 31024に、西端をS D 31023に切られているため全容は不明である。検出長2.4m、幅0.37mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さ0.04mを測る。埋土は暗灰黄色極粗粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 31028

3調査区のⅧ-11-3 G地区で検出した。東一西に直線的に伸びる溝である。全長1.9m、幅0.23mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さ0.03mを測る。埋土は暗灰黄色極粗粒砂混粘土質シルトの單一層である。埋土内から土師器細片が数点出土したのみである。本遺構はS D 31027の東側延長線状に位置し、遺構の規模や埋土もほとんど変わらないことなどから同一遺構の可能性が高い。

S D 31029

3調査区のⅧ-11-4 G地区で検出した。東一西に直線的に伸びる溝である。東端で、S D 31030の一部分を切っている。遺構の規模は、全長1.4m、幅0.21mを測る。断面形状は浅い逆半円形を呈し、深さは0.04m前後である。暗灰黄色極粗粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 31030

3調査区のⅧ-11-4 G地区で検出した。南一北に伸びる溝である。南西隅部分をS D 31029に切られている。検出部分で全長2.5m、幅0.55mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さ0.03mを測る。灰オリーブ色極粗粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 31031

3調査区のⅧ-11-4 G地区で検出した。東一西に直線的に伸びる溝である。全長1.5m、幅0.15mを測る。断面形状は浅い半円形を呈し、深さ0.02m前後を測る。埋土は暗灰黄色シルトの單一層である。遺物は出土していない。

S D 31032

3調査区のⅧ-11-4 G地区で検出した。南一北に伸びる溝である。北端でS P 31015の西部分を切っている。遺構の南部分は調査区外に至る。検出長4.2m、幅0.5~1.0mを測る。断面形状は不整逆台形を呈し、深さは0.1mを測る。埋土はシルト質粘土~シルトが堆積している。遺物は出土していない。

S D 31033

S D 31032の東側約0.2mの地点で検出した。全長2.3m、幅0.9mで、南一北に伸びている。断面形状は浅い皿形を呈し、深さ0.07mを測る。埋土は5層がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

S D 31034

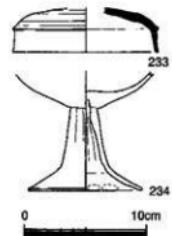
3 調査区のⅧ-11-4 G・H 地区で検出した。南一北に伸びる溝である。全長5.9m、幅1.4mを測る。断面形状は浅い皿形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土は上から暗灰黄色極粗粒砂泥粘土、暗灰黄色粘土がレンズ状に堆積している。遺物は古墳時代中期に比定される土師器の小片が出土している。

S D 31035 (第98図、図版四-一)

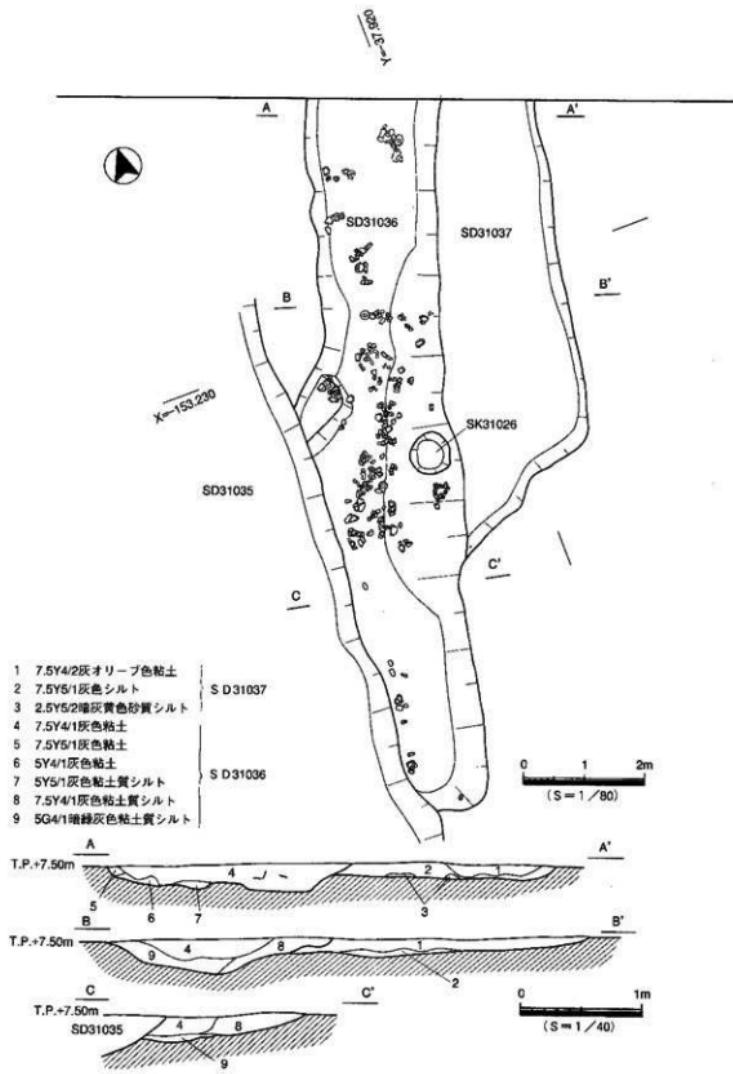
3 調査区のⅧ-11-3～5 H 地区で検出した。南一北に伸び、S K 31021と S D 31036の一部分を切っている。両端は調査区外に至り、検出長18.5m、幅1.3～1.9mを測る。深さは北側0.28m (T.P. +7.08m)、南側0.41m (T.P. +6.89m) を測り、南に向かうにつれて深くなる。埋土はレンズ状に堆積する5層で構成されているが、いずれも粘土～シルト中心の層相である。遺物は古墳時代中期中葉に比定される土師器、須恵器の小片が少量出土した。2点 (233・234) を図化した。233は須恵器杯蓋の小片である。鋭く突出度の高い稜を持つもので、口縁端部は水平である。T K 208型式にあたる。234は土師器高杯である。杯部中位以上が欠損している。造構の構築時期は古墳時代中期中葉（5世紀中葉）が考えられる。

S D 31036 (第99～102図、図版四-一・六一～六三)

3 調査区のⅧ-11-3 H・I・4 H 地区で検出した。南南西～北北東に伸びる。東部で S D 31037 の西肩を切り、西部で S D 31035 に切られている。検出長11.6m、幅1.85～2.15mを測る。断面形状は概ね皿形を呈する。深さは北方0.21m (T.P. +7.19m)、南方0.21m (T.P. +7.14m) を測り、若干南が低い。埋土は6層から成るが、最終段階の埋土である4層には炭化物が多く含まれている。遺物は4層内から、古墳時代中期前半～中葉（5世紀前半～中葉）に比定される土師器（壺・鉢・甕・高杯・瓶）や須恵器（壺・甕・杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・把手付甕・瓶）等が多量に出土した。図化したものは43点 (235～277) である。235は土師器直口壺。236は口縁部を欠くが235と同様土師器直口壺と推定される。土師器壺は7点 (237～243) で、口径が12.8～15.0cmの中形のもの237～241と口径が17.6～18.7cmを測る大形のものに区別される。237・242は口縁端部が内側にわずかに肥厚するもので布留式甕の属性を留めている。243は口縁端部が小さく外折するもので、他に比して器壁が厚い特徴を持っている。土師器高杯は4点 (244～247) で、椀形の杯部を有する244・245と大形で杯部下半に段を有する246がある。247は小形高杯の脚部である。248・249は土師器の甕である。ただ、249については、体部上半が内湾気味に立ち上がる形態のため他の器種である可能性がある。須恵器杯蓋は5点 (250～254) で、252～254がほぼ完形である。天井部が低く稜の突出度が大きい252がT K 216型式。他はT K 208型式。253は酸化焰焼成で、外面全面に淡茶色の釉が施釉されている。須恵器杯身は8点 (255～262) で残存率は1/6～1/2程度である。256・260がやや焼成が不良で、256が青灰色、260が一部淡橙色を帯びた淡青灰色である。T K 216型式～T K 208型式に比定される。須恵器高杯は8点 (263～270) で、有蓋高杯の蓋3点 (263～265)、有蓋高杯1点 (266)、無蓋高杯2点 (267・268) と脚部の2点 (269・270) がある。263は完形で、天井部には沈線を挟んで刺突文が二重に巡る。268・270は焼成不良で白灰色の色調

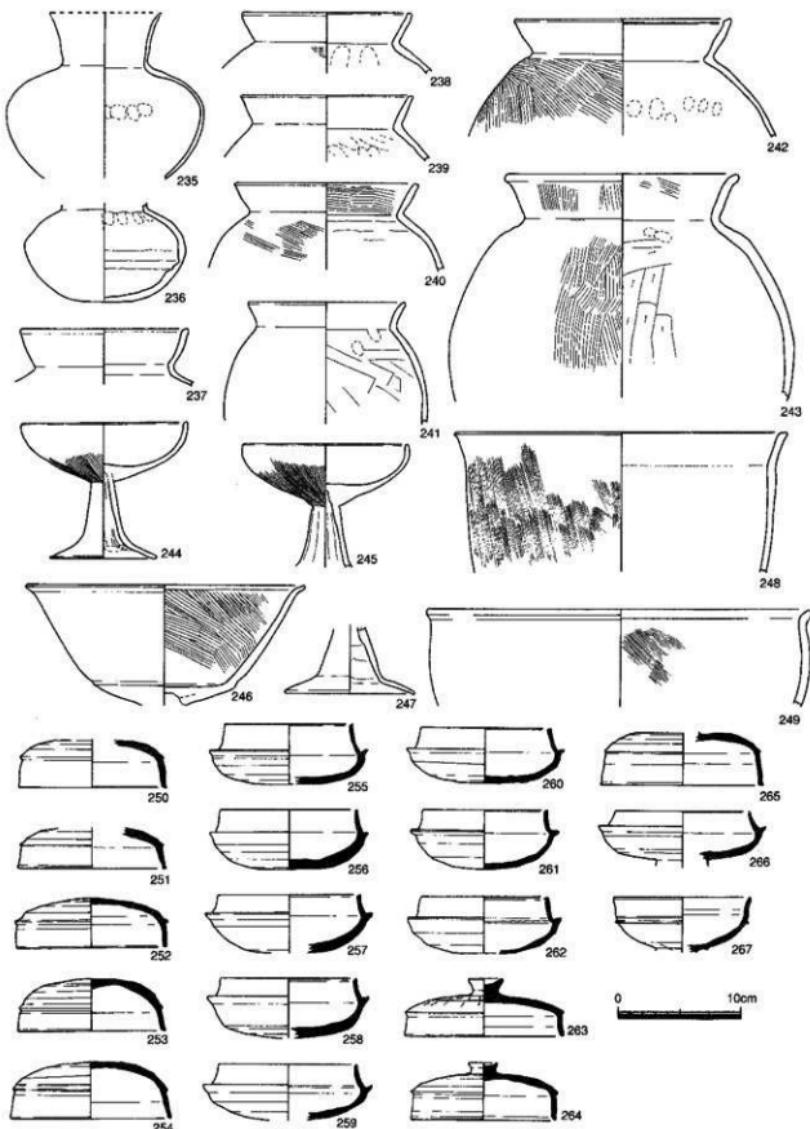


第98図 S D 31035出土
遺物実測図

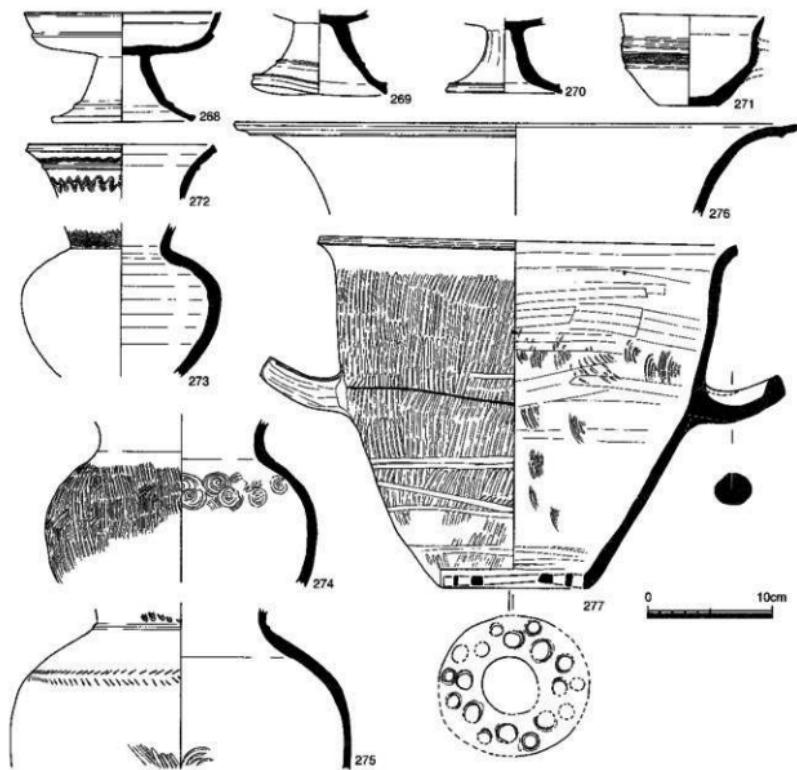


第99図 S D31036、S D31037平断面図

を呈する。T K85型式～T K216型式に比定される。271は須恵器把手付椀である。T K216型式に併行するものであろう。273は破片のため詳細は不明であるが須恵器の壺ないしは甕になる可能性



第100図 S D 31036出土遺物実測図その1

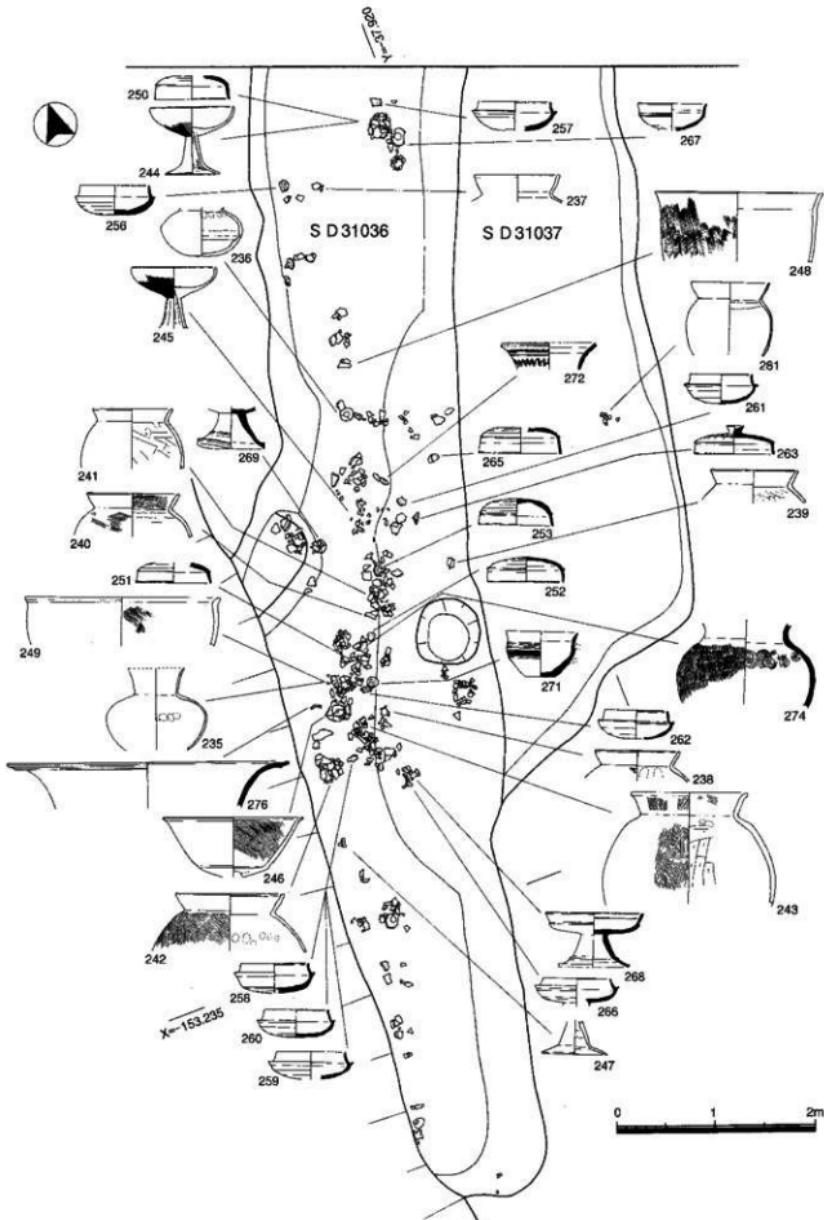


第101図 S D 31036出土遺物実測図その2

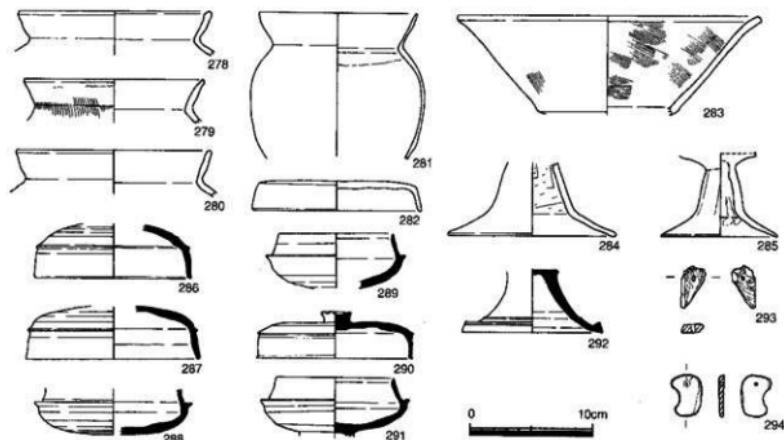
がある。272・274～276は須恵器壺である。272の口縁部外面には一条の凸帯の上下に波状文が施文されている。口縁端部に面を持つことからTK216型式に比定される。275は体部外面に刺突文が施文されている。276は大形の壺で、TK73型式にあたる。277は須恵器壺ではほぼ完形に復元できる。口径34.0cm、器高28.4cm、底径12.3cmを測る。口縁部が外反し面を持つもので、体部外面は縦方向のタキで半角状の把手部分の位置に一条の沈線が巡る。蒸気孔は大形円孔の外縁に18個の小円孔を巡らす。出土遺物の中で須恵器類に関するTK85型式～TK208型式のものが含まれていることから、遺構の存続時期は古墳時代中期前半～中葉（5世紀前半～中葉）が推定される。

S D 31037（第99・102・103図、図版四一・六三）

3調査区のⅦ-11-3・4H・I地区で検出した。西肩部分をS D 31036に切られ、北部が調査区外に至る。検出長7.4m、幅2.1mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さ0.1～0.14mを測る。埋土は粘土～シルトで構成されている。埋土内からは古墳時代中期に比定される土師器、須恵器、



第102図 S D 31036、S D 31037出土遺物位置図



第103図 S D 31037出土遺物実測図

石製品が少量出土している。17点(278~294)を図化した。278~280は土師器壺である。278は布留式壺の形態を残す。281は土師器壺で全体的に器壁が薄い。全体的に風化が進行しており、調整は不明瞭である。282は土師器壺で1/2程度が残存している。外面は比較的丁寧なナデ調整が全面に行なわれている。当該期のものとしては、類例が少ないもので混入品の可能性がある。283~285は土師器高杯である。283は大形の有段高杯である。286・287は須恵器杯蓋である。286がO N46型式、287がT K208型式にある。288・289は受部が水平に伸びるもので、T K208型式に類例が認められる。290は須恵器有蓋高杯の蓋で、ほぼ完形成である。291は有蓋高杯で、脚部を欠損するが接合部分の痕跡からスカシ孔を有することが確認できる。292は須恵器高杯の脚部で、脚端部は上部に拡張され内傾する面を形成する。288~292の須恵器類はT K208型式に比定される。293・294は滑石製の石製品である。293は未製品、294は勾玉である。出土した須恵器類からみて、遺構の帰属時期は古墳時代中期中葉(5世紀中葉)が想定される。従って、西接するS D 31036とは時期的に重複する時期があるため、本遺構がある程度埋没した段階にS D 31036が開削された可能性が考えられる。

S D 31038

4調査区のⅧ-12-4・5A地区で検出した。北東-南西に伸び北端は調査区外に至る。検出長13.7m、深さ0.03~0.13mで、幅は南部で1.0m、北部では拡張して4.7mを測る。断面皿状を呈し、埋土は褐色粘土質シルトである。土師器、須恵器片の他、12~13世紀頃の瓦器片が出土している。

S D 31039・S D 31040

S D 31039は、4調査区のⅧ-12-5・6C地区に位置する北西-南東の溝で、検出長7.8m、幅1.0m~2.6m、深さ0.07~0.42mを測り、途中で二股に分かれる部分がある。断面逆台形を呈

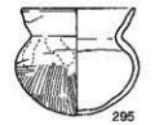
し、埋土は灰褐色細粒砂～粗粒砂泥シルトでマンガンを含む。東部で S D 31040と分岐しており、S D 31040は検出長2.6m、幅0.4～0.75m、深さ0.14～0.27mを測る。5世紀末～6世紀初頭の土器が出土している。

S D 31041

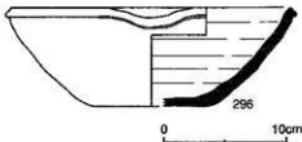
4調査区のⅧ-12-6B～C地区で検出した。北西～南東に伸びる。検出長5.1m、幅1.7m～0.9m、深さ0.07～0.21mを測る。断面逆台形を呈し底面には凹む部分がみられ、埋土は灰褐色細粒砂～小礫混シルトで鉄分を含む。5世紀末頃の土器が出土している。なお底部では S K 31033を検出している。

S D 31042～S D 31060・S D 31063 (図版六二)

全て6調査区で検出したもので、合計20条を数える。調査区西端では南～北に伸びるもののが中心で、調査区中央から東端では、主に東～西に伸びている。S D 31043・S D 31046・S D 31047・S D 31048・S D 31049・S D 31052・S D 31053・S D 31058は、上面の遺構の掘り残しとみられる。時期的には、奈良時代～平安時代。そのほかのものについては、概ね古墳時代中期～後期に比定される。295は S D 31045から出土した土師器小形壺である。口縁部を欠く以外は完存している。体部最大径は口径を凌駕するもので口径9.0cm、器高8.8cm、体部最大径10.0cmを測る。古墳時代中期前半（5世紀前半）の所産と考えられる。296は S D 31053から出土した東播系の須恵器捏鉢である。1/2程度が残存しており、口径22.8cm、器高8.2cmを測る。平安時代後期（12世紀中葉）の所産と考えられる。各溝の法量は、下記の第19表にまとめた。



第104図 S D 31045
出土遺物実測図



第105図 S D 31053出土遺物実測図

第19表 6調査区 第3-1面 S D 31042～S D 31060、S D 31063法量表

遺構番号	地 区	全長(検出長)(m)	幅(最大)(m)	深さ(m)	断面形状	出土遺物
S D 31042	Ⅷ-12-8-9I	5.40	0.45	0.03	U字形	土師器、須恵器、サヌカイト
S D 31043	Ⅷ-12-8I-J	6.00	0.70	0.03	タ	土師器、須恵器
S D 31044	タ	9.40	0.30	0.04	タ	
S D 31045	Ⅷ-12-8J	3.20	0.50	0.07	タ	土師器、須恵器
S D 31046	タ	8.80	0.50	0.06	タ	土師器、須恵器、瓦器
S D 31047	Ⅷ-12-8-9J	4.90	0.40	0.05	タ	土師器、須恵器
S D 31048	タ	2.90	0.30	0.08	タ	土師器、須恵器、瓦器
S D 31049	タ	14.30	0.55	0.07	タ	土師器、須恵器、瓦器
S D 31050	タ	14.30	0.45	0.11	タ	赤生土器？
S D 31051	タ	14.30	0.60	0.10	タ	
S D 31052	Ⅷ-12-8J、Ⅷ-13-8A	8.60	0.40	0.06	タ	土師器、黒色土器
S D 31053	Ⅷ-13-8A	6.20	0.55	0.10	タ	土師器、須恵器、瓦器
S D 31054	Ⅷ-12-8J、Ⅷ-13-8A	5.40	1.30	0.07	タ	土師器
S D 31055	Ⅷ-13-8A	1.30	0.30	0.07	タ	
S D 31056	Ⅷ-13-9A	4.50	0.50	0.07	タ	
S D 31057	タ	2.10	0.40	0.08	タ	土師器
S D 31058	Ⅷ-13-9B	3.10	1.00	0.12	タ	須恵器、瓦質土器、備前焼
S D 31059	Ⅷ-13-10B	2.85	0.70	0.15	タ	須恵器、瓦器、埴輪
S D 31060	Ⅷ-13-9C	3.50	0.35	0.07	タ	土師器、須恵器
S D 31063	Ⅷ-13-10B-C	9.70	0.90	0.17	タ	

S D 31061 (第106図、図版六三)

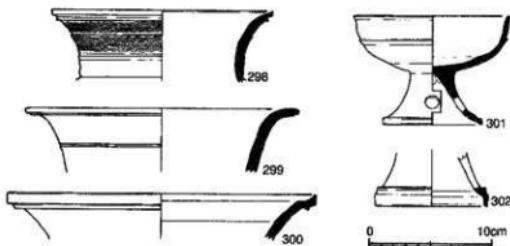
6調査区北東部のⅦ-13-9C地区で検出した。東-西に伸びるもので、検出長5.8m、幅0.7mを測る。断面形状はU字形で深さ0.09mを測る。埋土は灰色極細粒砂混粘土質シルトである。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器、石製品が出土している。滑石製勾玉1点(297)を図化した。297は「C」の字形を呈する板状の勾玉で、小孔が2個穿たれている。5世紀代に比定されよう。

S D 31062 (第107図、図版六三・六四)

6調査区南東部のⅦ-13-10B・C地区で検出した。東-西に伸びるもので、西端はS K 31051に切られている。検出長11.3m、幅2.2mを測る。断面形状はU字形で深さ0.1mを測る。埋土は灰白色極細粒砂混粘土質シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期～後期に比定される土師器、須恵器が出土している。5点(298～302)図化した。298～300は須恵器甕である。3点共に口縁部が外反し、口縁部直下に凸帯を巡らすもので、口縁端部の形状では、小さく上方に拡張する298、平坦な面を持つ299、上方に大きく拡張する300がある。298がT K 216型式、299がT K 85型式、300がO N 46型式に比定される。301は須恵器無蓋高杯である。焼成は不良で、灰白色の色調を呈する。杯部の口縁端部が水平な面を持つ特徴からT K 208型式に併行するものと推定される。302はスカシ孔を有する須恵器高杯の脚部である。出土した遺物から、古墳時代中期前半の遺構であることが推定される。

S D 31064～S D 31071

7調査区全域で、合計8条の溝を検出した。方向は、東-西(S D 31068～S D 31071)、北西-南東(S D 31065)、北東-南西(S D 31064・S D 31066)、南北(S D 31067)に伸びるものがある。溝の埋土は粘土質シルトの単一層である。遺物が出土していないため時期は不明である。各溝の法量は下記の第20表にまとめた。



第106図 S D 31061出土遺物実測図

第20表 7調査区 第3-1面 S D 31064～S D 31071法量表

遺構番号	地区	全長(検出長)(m)	幅(最大)(m)	深さ(m)	断面形状	出土遺物
S D 31064	Ⅶ-13-10D	2.3	0.5	0.08	U字形	
S D 31065	Ⅶ-13-10E	3.3	0.3	0.05	浅い楕形	
S D 31066	ク	3.6	1.6	0.43	皿状	
S D 31067	Ⅶ-13-10F、Ⅷ-18-1F	4.3	0.5	0.06	△	
S D 31068	Ⅶ-18-1F	3.3	0.7	0.07	楕形	
S D 31069	Ⅷ-18-1F-G	7.0	1.8	0.24	U字形	
S D 31070	Ⅷ-18-1G-H	5.6	0.5	0.11	楕形	
S D 31071	Ⅷ-18-2G	3.2	0.4	0.07	△	

S D 31072～S D 31075

8調査区全域で合計4条の溝を検出した。溝は幅が狭く、南一北に伸びるものや南西一北東に蛇行するものなど多様である。埋土は粘性の強い細粒砂混シルト質粘土の單一層が多い。時期については、S D 31074が古墳時代後期、その他は出土遺物がないため帰属時期は不明である。

第21表 8調査区 第3-1面 S D 31072～S D 31075法量表

遺構番号	地 区	全長(検出部)(m)	幅(最大)(m)	深さ(m)	断面形状	出土遺物
S D 31072	VII-18-1H	2.30	1.4	0.10	浅い皿形	
S D 31073	VII-18-1～3J	16.1	0.6	0.19	逆台形	
S D 31074	VII-18-3J, VII-19-2・3A・B	23.1	0.9	0.35	タ	土師器
S D 31075	VII-18-3J-2J, VII-19-2A-B	30.4	0.7	0.10	タ	

小穴・柱穴 (S P)

S P 31001～S P 31007

1調査区の全域で7個検出した。散発的な分布であり遺構の性格等も不明である。S P 31004を除いて円形を呈するものが大半で、径0.2～0.6m、深さ0.06～0.21mを測る。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトである。遺物は出土していないため帰属時期は不明である。各法量は、下記の第22表にまとめた。

第22表 1調査区 第3-1面 S P 31001～S P 31007法量表

遺構番号	地 区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 31001	VII-15-1I	0.60	0.60	0.12	円形	
S P 31002	タ	0.45	0.45	0.09	タ	
S P 31003	VII-15-1J	0.50	0.50	0.21	タ	
S P 31004	タ	0.60	0.26	0.18	不定形	
S P 31005	VII-11-1A	0.30	0.30	0.18	円形	
S P 31006	タ	—	0.45	0.10	半分欠損	
S P 31007	VII-11-2B	0.20	0.20	0.06	円形	

S P 31008～S P 31025

3調査区で検出した小穴である。中央部から南部に集中する傾向が見られた。円形および楕円形を呈するものが大半で、径0.08～0.58m、深さ0.02～0.06mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする単一層である。遺物は出土していない。各法量は、下記の第23表にまとめた。

第23表 3調査区 第3-1面 S P 31008～S P 31025法量表

遺構番号	地 区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 31008	VII-11-3G	0.50	0.32	0.04	楕円形	
S P 31009	タ	0.55	0.46	0.05	不整形	
S P 31010	タ	0.44	0.27	0.02	楕円形	
S P 31011	VII-11-4G	0.21	0.13	0.02	タ	
S P 31012	タ	0.14	0.09	0.02	タ	
S P 31013	タ	0.12	0.10	0.02	円形	
S P 31014	タ	0.41	0.35	0.04	タ	
S P 31015	タ	0.32	0.22	0.03	楕円形	
S P 31016	タ	0.58	0.43	0.04	タ	
S P 31017	タ	0.16	0.15	0.03	円形	
S P 31018	タ	0.09	0.08	0.02	タ	
S P 31019	タ	0.31	0.27	0.04	楕円形	
S P 31020	タ	0.45	0.33	0.04	不整形	
S P 31021	タ	0.17	0.14	0.03	楕円形	
S P 31022	VII-11-3H	0.36	0.32	0.03	円形	
S P 31023	VII-11-4H	0.37	0.29	0.06	楕円形	土師器
S P 31024	タ	0.22	0.20	0.03	円形	
S P 31025	タ	0.12	0.10	0.02	タ	

S P 31026～S P 31032

4調査区の東部で7個検出した。そのうちの、S P 31026～S P 31029がS O 31001の周辺から検出されており、これらの遺構に関係する可能性がある。埋土はS P 31026～S P 31028が褐色灰色細粒砂混粘土質シルトである。規模が大きいS P 31029の埋土はS K 31032と同じである。S P 31028から弥生時代後期の土器、S P 31030から土師器、須恵器片が出土している。

第24表 4調査区 第3-1面 S P 31026～S P 31032法量表

遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 31026	VII-12-5C	0.47	0.30	0.09	楕円形	
S P 31027	タ	0.33	0.30	0.16	円形	
S P 31028	タ	0.81	0.43	0.09	不整形	弥生土器
S P 31029	タ	0.66	0.64	0.20	円形	
S P 31030	VII-12-6C	0.47	0.26	0.08	楕円形	須恵器、土師器
S P 31031	VII-12-6B-C	0.63	0.49	0.14	タ	
S P 31032	VII-12-6B	0.35	0.27	0.05	タ	

S P 31033～S P 31094

6調査区の中央部分を中心に合計62個を検出した。S D 31051とS O 3102間の小穴群の中には、一部規則的な配列を確認できた。S P 31043・S P 31048・S P 31050・S P 31054は、1×2間の掘立柱建物(S B 31001)を構成するとみられる。また、S P 31069・S P 31071・S P 31076・S P 31082も2×2間以上の掘立柱建物(S B 31002)を構成する可能性がある。同じ場所で建て替えが行われているので、小穴ごとの切り合いが多くみられる。S B 31001・S B 31002は、時期的にはS P 31048内から出土した遺物から古墳時代後期(6世紀代)に比定される。

第25表 第6調査区 第3-1面 S P 31033～S P 31094法量表

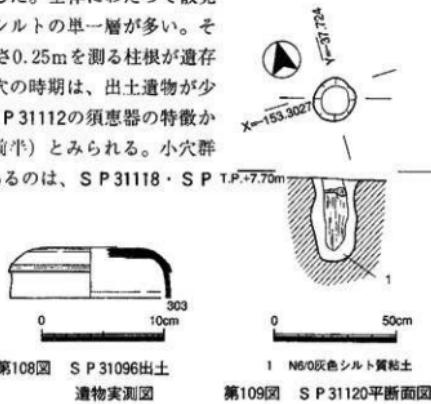
遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 31033	VII-12-8J	0.60	0.50	0.12	円形	
S P 31034	VII-13-8A	—	0.70	0.09	不明	
S P 31035	タ	0.70	0.55	0.12	楕円形	
S P 31036	タ	0.40	0.30	0.55	円形	土師器
S P 31037	タ	0.60	0.40	0.07	楕円形	
S P 31038	タ	0.40	0.35	0.08	円形	
S P 31039	タ	0.40	0.40	0.10	タ	
S P 31040	VII-12-8J	0.50	0.45	0.09	タ	
S P 31041	VII-13-8A	0.54	0.50	0.10	楕円形	
S P 31042	VII-12-8J	0.55	0.40	0.13	タ	
S P 31043	タ	0.62	0.54	0.17	タ	(S B 31001)
S P 31044	VII-12-8-9J	0.36	0.20	0.18	タ	土師器
S P 31045	VII-12-9J	0.70	0.40	0.15	タ	
S P 31046	タ	—	0.30	0.07	円形	
S P 31047	タ	0.60	0.40	0.06	楕円形	
S P 31048	VII-13-9A	0.60	0.50	0.07	タ	須恵器、土師器 (S B 31001)
S P 31049	VII-12-9J	0.50	0.48	0.05	円形	土師器
S P 31050	タ	0.60	0.50	0.10	楕円形	(S B 31001)
S P 31051	タ	0.50	0.45	0.12	タ	
S P 31052	タ	0.50	0.40	0.17	円形	土師器、須恵器
S P 31053	タ	0.60	0.60	0.17	タ	土師器
S P 31054	タ	0.50	0.40	0.12	楕円形	弥生土器(S B 31001)
S P 31055	タ	0.40	0.40	0.10	円形	土師器
S P 31056	タ	0.50	0.30	0.11	楕円形	弥生土器
S P 31057	タ	0.48	0.44	0.13	円形	
S P 31058	タ	0.42	0.42	0.14	タ	

遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 31059	Ⅶ-12-9J	0.40	0.34	0.08	円形	
S P 31060	タ	0.34	0.30	0.04	タ	石(和泉砂岩)
S P 31061	タ	0.40	0.30	0.1	タ	
S P 31062	タ	0.54	0.44	0.09	タ	
S P 31063	Ⅶ-13-8A	0.58	0.52	0.16	タ	
S P 31064	タ	0.42	0.40	0.1	タ	
S P 31065	Ⅶ-13-9A	0.60	0.40	0.14	楕円形	土師器
S P 31066	Ⅶ-13-9A	0.54	—	0.17	楕円形	
S P 31067	タ	0.44	—	0.18	タ	
S P 31068	タ	0.54	0.46	0.19	タ	
S P 31069	Ⅶ-13-8A	0.56	0.52	0.26	円形	(S B 31002)
S P 31070	タ	0.68	0.66	0.18	タ	土師器
S P 31071	タ	0.68	0.60	0.07	タ	弥生土器(S B 31002)
S P 31072	Ⅶ-13-9A	0.32	0.32	0.1	タ	
S P 31073	タ	0.50	0.50	0.15	タ	
S P 31074	Ⅶ-13-9B	0.50	0.55	0.07	タ	
S P 31075	タ	0.50	0.50	0.13	タ	土師器
S P 31076	タ	0.44	0.38	0.07	タ	(S B 31002)
S P 31077	Ⅶ-13-8B	0.40	0.30	0.1	楕円形	
S P 31078	タ	0.60	0.50	0.09	タ	
S P 31079	タ	0.70	0.50	0.13	タ	
S P 31080	タ	0.80	0.60	0.05	タ	土師器
S P 31081	タ	0.80	0.60	0.16	タ	
S P 31082	タ	0.40	0.32	0.13	タ	(S B 31002)
S P 31083	Ⅶ-13-9B	—	0.35	0.12	タ	
S P 31084	タ	—	0.45	0.08	タ	
S P 31085	Ⅶ-13-9A	0.58	—	0.15	円形	
S P 31086	タ	0.62	0.50	0.15	タ	
S P 31087	タ	0.64	0.58	0.20	楕円形	
S P 31088	タ	0.70	0.40	0.08	タ	
S P 31089	Ⅶ-13-9B	0.34	0.30	0.09	円形	
S P 31090	Ⅶ-13-9C	0.35	0.35	0.18	タ	
S P 31091	タ	—	0.74	0.1	楕円形	土師器
S P 31092	タ	—	0.28	0.04	タ	不明
S P 31093	タ	—	0.35	0.08	楕円形	
S P 31094	Ⅶ-13-10B-C	0.68	0.58	0.06	タ	土師器・須恵器

S P 31095～S P 31128

7調査区全域と8調査区の西部で検出した。全体にわたって散発的に分布している。小穴の埋土は粘土質シルトの單一層が多い。そのうち、S P 31120内からは径0.11m、長さ0.25mを測る柱根が遺存していた。柱根の材質は不明である。柱穴の時期は、出土遺物が少ないため不明な所があるがS P 31096・S P 31112の須恵器の特徴から古墳時代中期～後期(5世紀～6世紀前半)とみられる。小穴群の中で規則的に配列されている可能性があるのは、S P 31118・S P T.P.-7.70m 31119・S P 31120である。

S P 31096から出土した須恵器杯蓋1点(303)を図化した。303は天井部が扁平で、U縁端部が水平な面をもつもので、TK208型式(5世紀中葉)に比定される。小穴の各法量は、次頁の第26表にまとめた。



第108図 S P 31096出土
遺物実測図

第109図 S P 31120平面面図

第26表 7・8調査区 第3-1面 S P 31095~S P 31128法量表

遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 31095	VII-13-10D	0.30	0.26	0.15	椭円形	
S P 31096	タ	0.60	0.26	0.13	不整形	須恵器
S P 31097	タ	0.80	0.40	0.08	椭円形	
S P 31098	タ	0.70	0.50	0.09	方形	
S P 31099	タ	0.30	0.30	0.06	タ	
S P 31100	タ	0.40	0.30	0.06	タ	
S P 31101	タ	0.50	0.40	0.08	椭円形	
S P 31102	VII-18-1D	0.40	0.30	0.10	方形	
S P 31103	タ	0.40	0.40	0.06	タ	
S P 31104	VII-13-10E	0.50	0.50	0.12	椭円形	
S P 31105	タ	0.60	0.60	0.17	円形	
S P 31106	タ	0.64	0.58	0.17	椭円形	
S P 31107	タ	0.50	0.30	0.08	タ	
S P 31108	タ	0.40	0.20	0.10	タ	
S P 31109	VII-18-1E	0.60	0.50	0.30	タ	
S P 31110	VII-13-10E	0.40	0.40	0.11	円形	
S P 31111	VII-18-1E	—	0.40	0.10	タ	
S P 31112	タ	0.45	0.30	0.15	タ	土師器
S P 31113	タ	0.50	0.30	0.12	タ	
S P 31014	VII-13-10G	0.30	0.30	0.10	タ	
S P 31115	VII-18-1G	0.42	0.30	0.10	タ	土師器
S P 31116	VII-18-1F-G	0.50	0.30	0.23	椭円形	
S P 31117	VII-18-1F	0.40	0.30	0.10	タ	
S P 31118	VII-18-1G	0.60	0.40	0.15	タ	
S P 31119	タ	0.60	0.50	0.10	隅丸方形	
S P 31120	タ	0.18	0.25	0.35	円形	柱根遺存
S P 31121	タ	0.57	0.38	0.05	椭円形	土師器
S P 31122	タ	0.40	0.30	0.19	タ	
S P 31123	VII-18-1-2G	0.22	0.20	0.08	円形	
S P 31124	VII-18-1G	0.32	0.30	0.04	タ	
S P 31125	タ	0.40	0.32	0.40	不整形	
S P 31126	タ	0.50	0.43	0.04	椭円形	
S P 31127	VII-18-2G	0.28	0.24	0.05	タ	
S P 31128	VII-18-2H	0.45	0.42	0.15	タ	土師器

自然河川（N R）

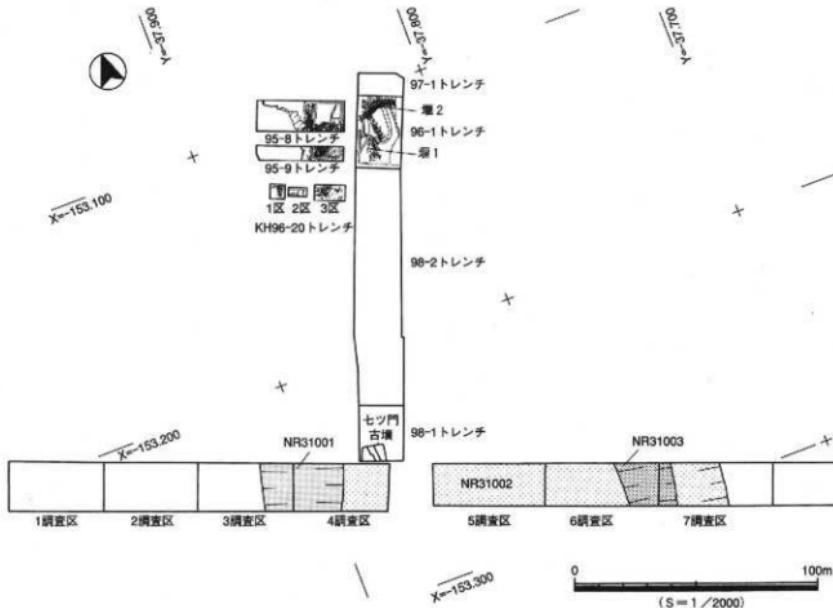
3調査区の東部から7調査区の中央部にかけて、3条の自然河川（N R 31001～N R 31003）を検出した。但し、全て下部調査の断面観察により部分的に確認されたものであり、詳細においては不明な点が多く、記述内容は概略程度のものである。なお、調査地の北120mでは、平成7～9年度に(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された95-8・9、96-1、97-1トレンチでは古墳時代中期の壙2基が検出されており、本調査で検出した自然河川との有機的な関係が推定される。

N R 31001（第110・111図、写真12、図版六四・六五）

3調査区の東部から4調査区の東部で検出した。座標の南北軸から東に約20度振るもので、東肩はN R 31002を切っている。検出長約17.5m、幅32m前後、深さ2.5m以上を測る。堆積土はおおよそ10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂と7.5Y4/1灰色シルト



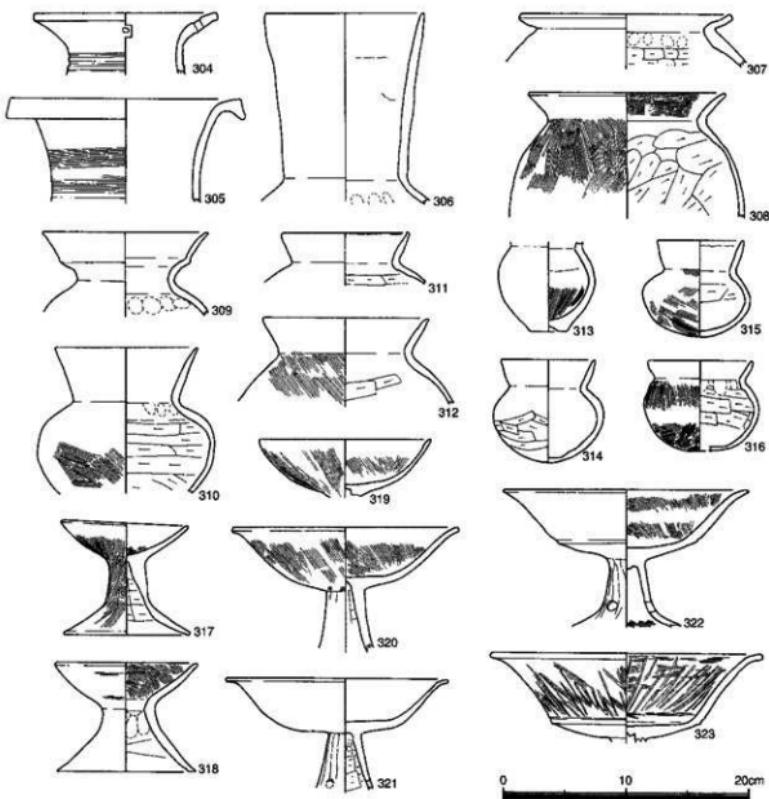
写真12 3調査区東部 N R 31001西肩検出状況（北西から）



*NR31001は最終段階の流路幅を表示している。

第110図 N R 31001～N R 31003平面略図

～粘土の互層状を呈する。細かいラミナが顯著に認められることから比較的緩やかな流れが想定され、またトラフ型斜交層理により南から北への流路方向が確認できる。遺物は弥生時代前期～古墳時代中期に比定される土器類が少量出土している。20点(304～323)を図化した。304～307・313が弥生土器、その他は土師器である。304は弥生時代前期(河内I-3様式)に比定される広口壺で、口縁部は完存している。口径14.8cmを測る。口縁部中位に径5mmを測る紐穴が穿たれている。胎土は粗く1～2mm大の長石、チャートが非常に多く含まれている。非生駒西麓産である。305は口縁端部が下外方に垂下する広口壺である。頸部外面に直線文を施す。生駒西麓産である。弥生時代中期(河内III-2様式)に比定される。306は弥生時代後期(河内V-1様式)の長頸壺で、体部上半以上が残存している。口径13.3cm、頸部高14.0cmを測る。生駒西麓産で色調は茶褐色を呈する。307は口縁端部が内傾する面を持つ甕である。体部内面はヘラケズリが行なわれている。時期は306と同じである。生駒西麓産である。313は小形の壺で口縁部を欠く。底部はやや突出したドーナツ底である。弥生時代後期の所産である。309は二重口縁壺で口縁部は完存している。口径13.4cmを測る。庄内式期新相に比定される。310は直口壺で底部を欠く。5世紀中葉に比定される。311・312は広口壺である。311の口縁端部は小さく内側に肥厚している。312は体部



第111図 N R 31001出土遺物実測図

外面に左上がりのハケ。311・312は共に屈曲部の少し下までヘラケズリが行なわれている。308は「く」の字に屈曲する口縁部を有する壺である。内面は口縁部横向方向のハケ、体部は屈曲部の少し下までヘラケズリ、外面は体部に細い単位のハケが施されている。全体に器壁が厚く焼成も良好である。類例としては少ないが、庄内式期古相段階に見られる体部外面に調整を施す壺に分類されよう。搬入品と考えられる。314・315は体部径が口径を凌駕する小形丸底壺である。体部外面の調整は、314がヘラケズリ、315がハケを施す。布留式期新相に比定される。316は口径に比して体部径がわずかに大きい小形丸底壺である。317・318は小形器台で中空の脚部をもつ317と受部と脚部が貫通する318がある。共に庄内式期古相に比定される。高杯は5点(319～323)で、杯

部が楕形の319、杯部屈曲部が丸味を帯びて口縁部が外反する320・321、杯部下半に段を有し口縁部が外反する322と大形の有段高杯である323に区別される。5点共に布留式期新相（4世紀末～5世紀中葉）に比定される。掲載した遺物の出土位置は、河川の東部の4調査区内で、最終段階の河川の東肩より東部から出土したものが多い。

各遺物の出土地区は、305・313・317・320がⅦ-12-5・6 A地区、304・306～308・315・316・318・319がⅦ-12-5・6 B地区、309・311・312・314・322・323がⅦ-12-5 C地区、310・321がⅦ-12-6 C地区である。最も新しい土器から見て、古墳時代中期中葉（5世紀中葉）には河川としての機能が停止したものと推定される。なお、北方約140m地点で（財）大阪府文化財調査研究センターにより実施された調査のうち95-8・9トレンチ、96-1トレンチ、97-1トレンチで検出された埴1・2に流れ込む河川としては、方向や時期的な問題を勘案すれば本河川が最も可能性が高い。

N R 31002 (第110・112・113図、写真13、図版六五～六九)

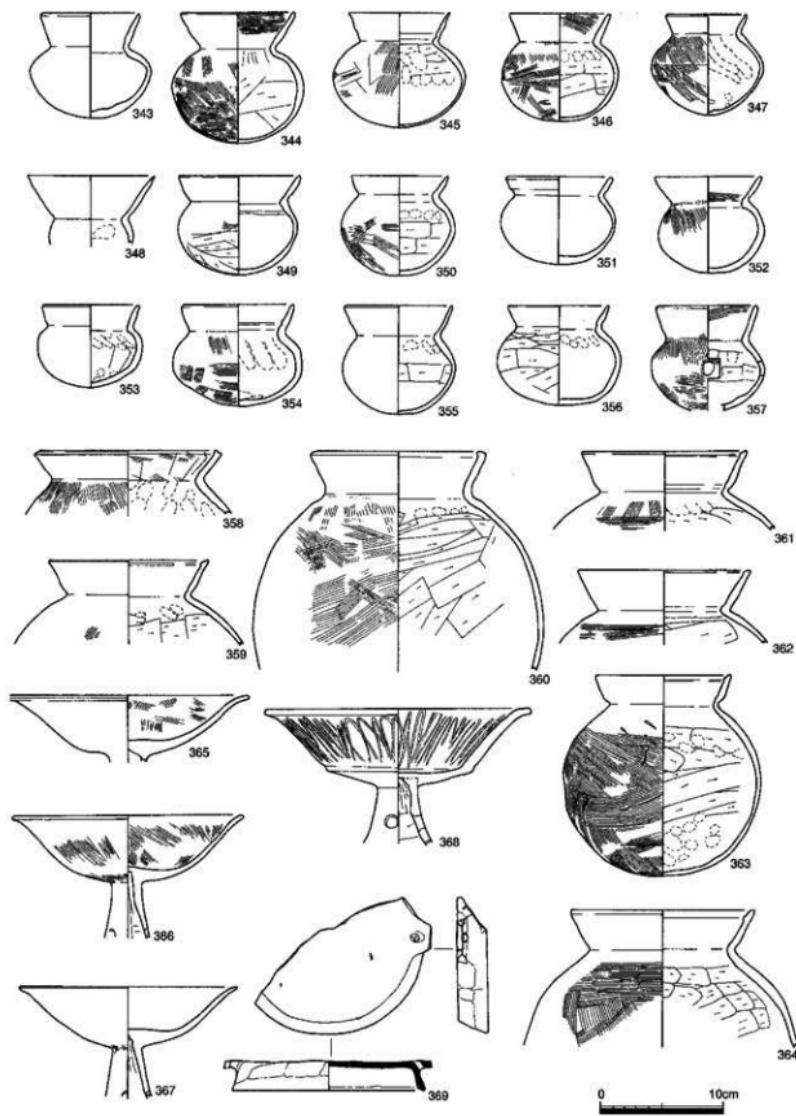
4調査区の東部から7調査区の中央部で検出した。西端がN R 31001、6調査区東部から7調査区西部ではN R 31003に切られている。検出長約17.5m、幅は4調査区と5調査区の未調査部分に存在したものとすれば約140m、深さ2.8mを測る。東南から北西への流路方向を示すトラフ型・プラナー型斜交層理が顕著に認められる、4調査区の東部から5調査区の西部にかけて自然堤防を形成している。一部に小礫～大礫を含む層があり、上部には鉄分が多く含んでおり色調は褐色が強い。遺物は摩滅した縄文時代晚期から弥生時代の土器が少量含まれる他、上層部からは、比較的遺存状態が良好な古墳時代前期後半（布留式期新相）に比定される土師器類が多く出土している。遺物は46点（324～369）を図化した。内訳は弥生土器14点（324～337）、土師器31点（338～368）、陶質土器1点（369）である。324～328は弥生時代前期の広口壺である。324は頸部に段を持つ。325～327は頸部にヘラ描きによる沈線文が施文されている。327の口縁部下半に1個の紐穴が穿たれている。328は頸部に布巻棒圧痕を端面につけた貼り付け突帯が残存部分で3条認められる。324・327が生駒西麓産である。324が河内I-1様式、325が河内I-2様式、327が河内I-3様式、326・328が河内I-4様式に比定される。329・330は如意形口縁を呈する弥生時代前期の甕の小片である。329は口縁端部に刻み目を施す。頸部のヘラ描き沈線は329が2条、330が4条である。2点共に生駒西麓産である。331は弥生時代前期の傘形の蓋で完形品である。口径10.0cm、器高2.0cmを測る。口縁端面の成形は粗く、凹凸面が目立つ。非生駒西麓産である。332は長頸の広口壺で、全体にローリングを受けているがほぼ完形に復元が可能である。口径22.9cm、器高41.0cm、体部最大径21.0cmを測る。体部下半に焼成後の穿孔が認められるため供獻土器であった可能性が高い。非生駒西麓産である。弥生時代中期（河内III-1様式）に比定される。333は広口壺で、口縁端部を上下に肥厚させ、端面に2



写真13 4調査区 N R 31001東肩および
N R 31002西部検出状況（南から）

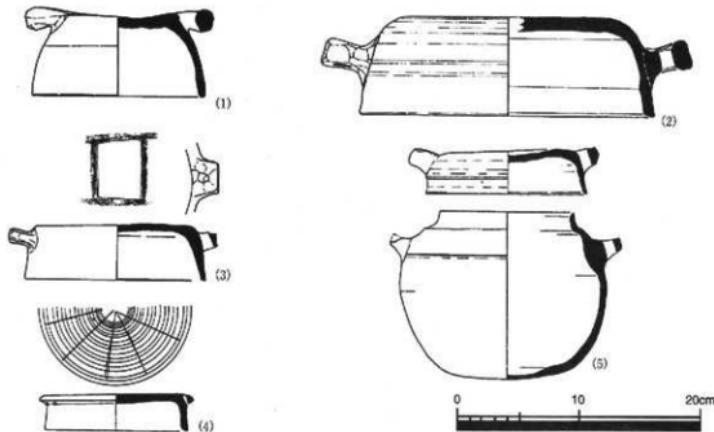


第112図 N R 31002出土遺物実測図その1



第113図 N R 31002出土遺物実測図その2

条の凹線文を施文している。口縁部内面に櫛描きによる刺突文が選る。生駒西麓産。弥生時代中期後半に比定される。334は算盤玉形の体部を有する細頸壺で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。全体にローリングを受けており調整は不明瞭である。生駒西麓産。弥生時代後期中葉に比定される。335は台付鉢の脚部と考えられる。生駒西麓産。弥生時代中期後半の所産である。336は高杯の脚部。337は甕の底部である。336・337は共に生駒西麓産で、弥生時代後期の所産である。338・339は土師器の二重口縁壺で、大形の338と小形の339がある。339は布留式期古相に比定される。土師器の小形丸底壺は18点(340～357)を図化した。完形品を含む資料であるが、河川内出土であるためローリングを受けて調整が不明瞭なものが大半を占めている。形態の特徴から直口壺の形態を持つもの340～342、体部が球形化し体部最大径が口縁部を凌駕するもの343～347、口径が体部最大径を凌駕するもの348、口径と体部最大径の差が少ないもの349～357に分類できる。なお、357は体部の中位に1個の孔が穿たれている。形態的にみて、348が布留式期古相に比定される他は布留式期新相のものが大半を占める。土師器甕は7点(358～364)で、363がほぼ完形品である以外は小片である。口縁端部の形態では、外傾する面を持つ358、内側に肥厚するが端面が面を持つ360、いわゆる布留式甕に通有な肥厚部分が内傾し面を持つ359・361～364に区別される。363の肩にはヘラ先による3個の刺突文が認められる。布留式期中相～新相に比定される。土師器高杯は4点(365～368)で、366・368は杯部が完存している。杯部の屈曲部が丸味を持つ365～367と屈曲部に段を持つ368がある。4点共に布留式期新相に比定される。369は陶質土器の短頸壺の蓋と推定されるもので、検出面から約1m下部から出土している。約1/2が残存しており、復元口径16.0cm、器高2.5cmを測る。ほぼ扁平な天井部から、斜下方に開き気味に口縁部が伸びるもので、口縁端部は平坦で内傾している。片方のみ残存している耳は、上面の形状が台形を呈するもので、側面はヘラによる面取りが行なわれており、上面から斜め方向に孔が穿



第114図 陶質土器の類例 (S=1/4、各文献から転載、文献名はP143を参照)

たれている。色調は赤褐色であるが、上面は灰かぶりのため白っぽくなっている。焼成は良好・堅密である。なお、本例については武末純一氏から百済系の土器であるとのご教示を受けている。陶質土器・須恵器の表記に違いがあるが、本例と同様の形状のものが出土した類例としては、大阪府堺市の陶邑・大庭寺遺跡〔1-0 L土器溜り上層〕(1)、陶邑・伏尾遺跡〔1766-0 O〕(2)、小阪遺跡〔C地区河川1〕(3)、同府八尾市の久宝寺遺跡(久宝寺北その1~3)〔NR 5001〕(4)、和歌山県和歌山市の大同寺遺跡(5)がある。

掲載した遺物の出土地点は、4調査区では345・352・356・364がVII-12-5 C地区、324・340・342・346・350・353・357・359・362がVII-12-6 C地区である。5調査区では327・361がVII-12-6 E地区、365がVII-12-7 E地区、326・328・341・343・348・349・351・355・360がVII-12-7 F・G地区、358がVII-12-7 H地区、333がVII-12-7・8 G地区、347・354がVII-12-7・8地区、330・339・344・366・368がVII-12-8 H・I地区である。6調査区では、329・331・335・336がVII-12-8・9 I J地区、332がVII-13-8 A地区、334・367がVII-13-9 B地区、338がVII-13-9・10 A地区である。7調査区では、325がVII-13-10 D・E地区、337・369がVII-18-1 E地区、363がVII-18-1 F・G地区である。

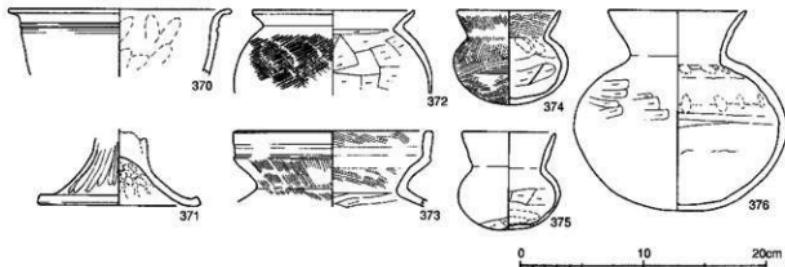
以上の出土遺物から、NR 31002は布留式期新相(4世紀末~5世紀初頭)には河川としての機能が停止したことが窺われる。なお、北約140m地点で(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された95-8・9トレンチ、96-1トレンチ、97-1トレンチ調査で検出された堰1・堰2については、本河川による洪水砂上に構築されたものと考えられる。一方、平成10年度に4調査区東部に北接する位置で(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された98-1トレンチ調査では、本河川により形成された自然堤防上で横穴式石室を主体部に持つ七ツ門古墳(6世紀中葉)が検出されている。

NR 31003(第110・115図、写真14、図版六九)

6調査区の東部から7調査区の西部にかけて検出した。NR 31002の東部を切っている。検出長17.5m、幅約20m、深さ1.2m以上を測る。トラフ型の斜交層理により南から北への流路の方向が推定される。遺物は磨耗を受けた弥生土器・土師器が出土している。遺物は7点(370~376)を図化した。370は如意形口縁を呈する弥生時代前期の壺の小片である。全体にローリングを受けており、調整は不明瞭である。371は弥生土器の台付鉢の脚部である。角閃石を多量に含む生駒西麓産である。弥生時代中期後半に比定される。372は「く」の字に小さく口縁部が屈曲する庄内式壺である。体部外面は右上がりのやや細いタタキの後、部分的にハケを施している。庄内式壺の中でも古相に位置付けられる。373は口縁部が直上方向に直線的に伸びる厚手の複合口縁壺である。口縁部は完存しており、口径16.0cmを測る。布留式新相に出現する器種の一つである。374・375の小形丸底壺は共に完形品で、体部最大径が口径を凌駕している。時期的には373と同様である。376は中形の直口壺で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径11.6cm、器高



写真14 6調査区 NR 31003検出状況
(北西から) [手前の洪水砂はNR 31002]



第115図 N R 31003出土遺物実測図

16.5cm、体部最大径17.9cmを測る。

掲載遺物の出土地点は、6調査区では、370・374・376がVII-13-9C地区、372・375がVII-13-10C地区、7調査区では371・373がVII-13-10D地区である。

河川埋没後の上部でTK216型式の須恵器が出土したSK31052が存在することから、古墳時代中期初頭までには河川として機能が停止していたようである。

・第114図の参考文献

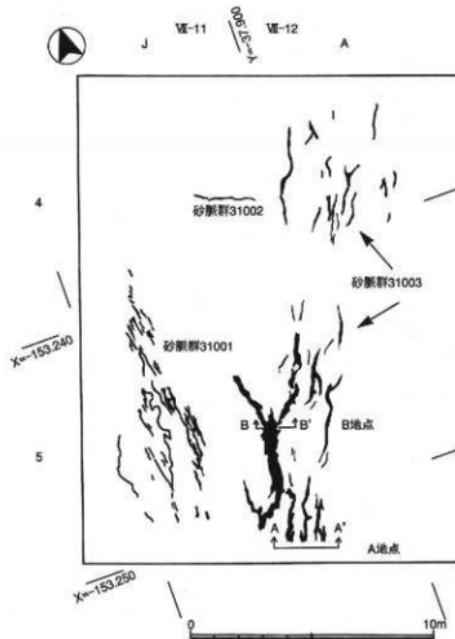
- (1) 藤田憲司・奥 和之・岡戸哲紀 1995『陶邑・大庭寺遺跡、』近畿自動車道松原・ささみ線建設に伴う発掘調査報告書(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90輯 P47
- (2) 岸本道昭・近藤康司・岡戸哲紀他 1990『陶邑・伏尾遺跡A地区』近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第60輯 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 P62
- (3) 赤木克祝他 1992『小阪遺跡』-近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書-大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター P293
- (4) 中西猪人他 1987『久宝寺北(その1~3)』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター P321
- (5) 松田正昭・山本高照・土井孝之 1987『2 大同寺遺跡』『弥生・古墳時代の大邱系土器の諸問題 第Ⅱ分冊--中国、四国、近畿、中部以東篇--』第21回埋蔵文化財研究集会 第4回調査研究会 埋蔵文化財研究会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 P419

地震痕跡

地震痕跡は、下層部分で埋没河川が存在した4調査区・6調査区・7調査区・8調査区を中心に検出されている。概ね第3-1面で捉えたものを中心にしており、広範囲の分布で時期差が認められることから、上面に達するものも一部含まれている。本文では、検出された地震痕跡のうちの砂脈個々に名称を冠せずに群として捉えて、調査区毎に概略を記述した。

砂脈群31001～砂脈群31003（第116・117図、写真15・16）

4調査区で検出したN R 31001の堆積土中で発生している。平面的には3方向の砂脈が確認でき、南-北方向が砂脈群31001、東-西方向が砂脈群31002、北東-南西方向が砂脈群31003と呼称した。砂脈群31003はN R 31001の流路にはほぼ平行している。N R 31001の堆積土は砂層とシルト～粘土層の互層状であり、そのうちのT.P. +7.1～6.75m付近に堆積する10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂～極細粒砂(11層)が上位の層を貫いている。噴砂は幅数mmのものから最大約40cmを測るものがあり、高さでは最大約1.0mの噴き上がりがみられる。層厚10cm程度の薄いシルト～粘土層では、比高差約10cmの断層を生じている部分や、細かく分断されている部分がある。液状化現象の時期であるが、N R 31001の埋没時期が古墳時代中期中葉（5世紀中葉）と考えられることから、これが上限に比定され、下限については第1-2面に切られる砂脈が認められることから、平安～鎌倉時代



第116図 4調査区西部 砂脈群31001～砂脈群31003平面図

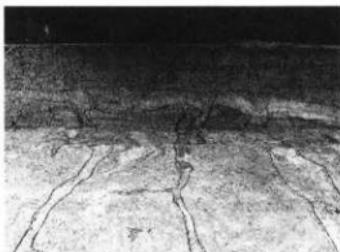
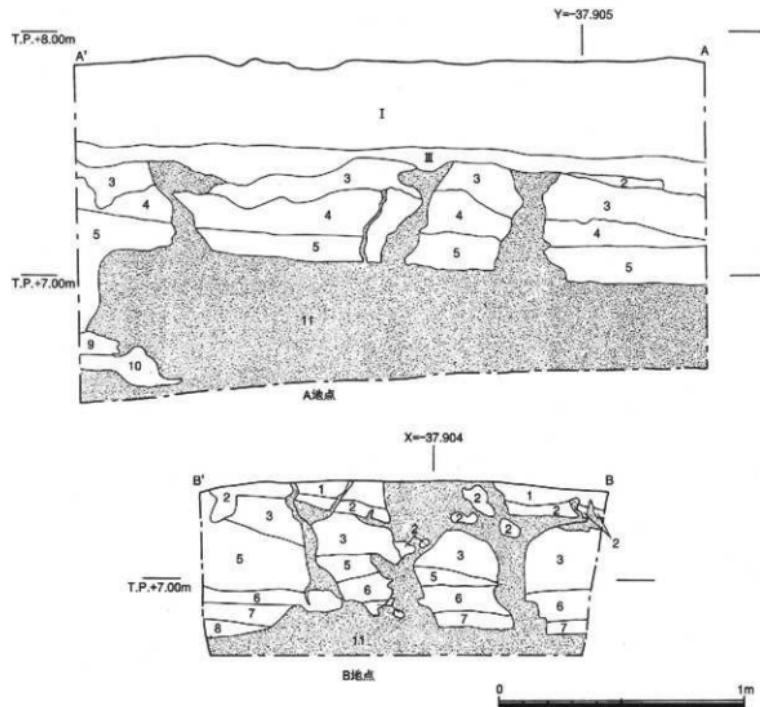


写真15 4調査区南壁 砂脈群31003
(A地点) 検出状況 (北から)



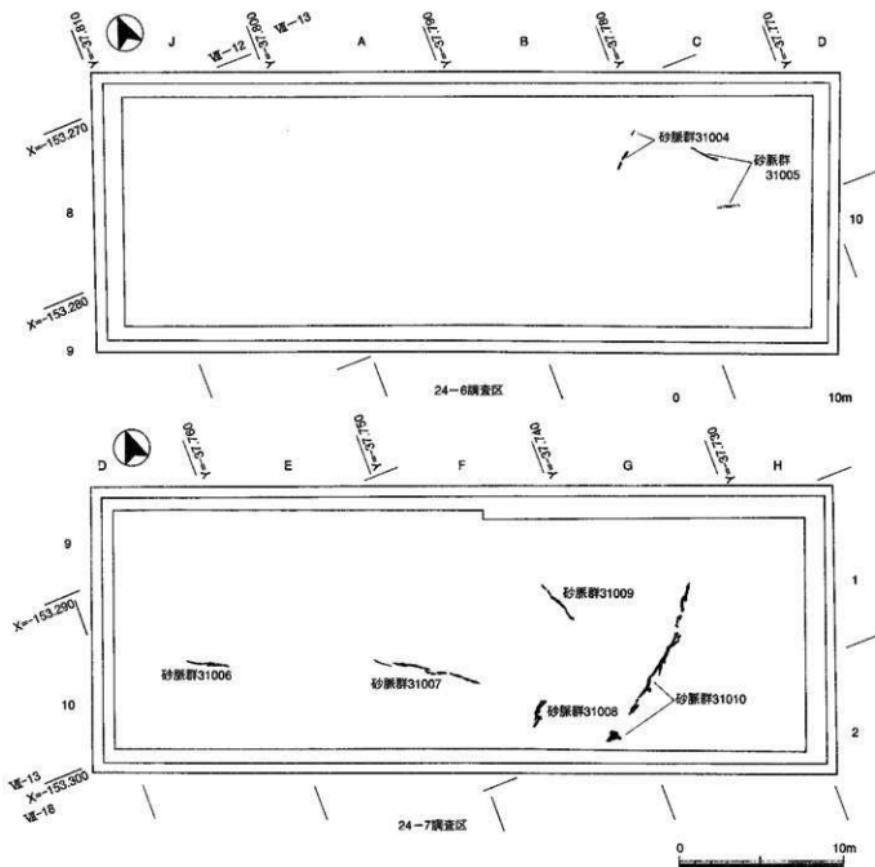
写真16 4調査区 砂脈群31003 (B地点)
検出状況 (北から)

までと近世までの少なくとも二度にわたることが確認できる。検出したなかで砂脈群31003が最も大規模なもので、北接する位置で検出された七ツ門古墳（6世紀中葉）の横穴式石室の一部が崩壊する原因となった地震に伴う可能性が高く、文献史料にみる天武十三年（684）の白鳳の南海地震との対応が想定される。



- | | | | |
|----|---------------------------------------|----|---|
| I | 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂混粘土質シルト（鉄分多量）（水田11002） | 6 | 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト（有機層）と5層の互層
（植物遺体を多く含む） |
| II | 2.5Y6/1 黄灰色粗粒砂混粘土質シルト（鉄分少量） | 7 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（有機層） |
| 1 | 2.5Y6/2 灰黄色シルト（鉄分少量） | 8 | 10Y5/1 灰色粘土質シルト混シルト（植物遺体を含む） |
| 2 | 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト（鉄分少量） | 9 | 2.5Y7/3 淡黄色細粒砂混シルトの互層（水平ラミナ） |
| 3 | 10YR6/4 に似る黄褐色粗粒砂混シルトの互層 | 10 | 5BG5/1 青灰色粘土質シルト～粘土（水平ラミナ） |
| 4 | 5Y6/2 灰オリーブ色シルト（水平ラミナ・植物遺体をラミナ状に多く含む） | 11 | 10YR8/3 に似る黄褐色中粒砂～極細粒砂（上部ほど細粒化） |
| 5 | N6/0 灰色シルト～粘土質シルトの互層（植物遺体をラミナ状に含む） | | |

第117図 4調査区西部 砂脈群31003A・B地点断面図



第118図 6調査区 砂脈群31004・砂脈群31005、7調査区 砂脈群31006～砂脈群31010平面図

砂脈群31004・砂脈群31005（第118図、写真17）

6調査区北東部のⅣ-13-9 B・C地区の2箇所で確認した。砂脈群31004が北東-南西、砂脈群31005が東-西ないしは北西-南東方向に伸びている。砂脈は長さ0.5~1.5m、幅0.2m前後を測る。砂脈内は極細粒砂で充填されており、砂脈群31004がN R 31002、砂脈群31005がN R 31003の洪水砂層が供給層となっている。地震が発生した時期は、S O 31003の埋土を貫いて砂脈が上がっていていることから少なくとも古墳時代中期以降とみられる。

砂脈群31006～砂脈群31010（第118図、写真18）

7調査区の全域で5箇所を確認した。砂脈群31006・砂脈群31007が北西-南東、砂脈群31008・

砂脈群31010が北東一南西、砂脈群31009が南一北方向に伸びている。砂脈は長さ1.0~4.5m、幅0.2~0.6mを測る。噴砂の供給層はN R 31002の洪水砂層である。地震が発生した時期は、砂脈群31006・砂脈群31007については、古墳時代中期中葉～後期（5世紀中葉～後期）に比定されるS O 31005の埋土を貫いていることや調査区北壁（東端）で基本層序の第V層上面まで噴き上がり、砂脈の上端が整地され水平になっていることから、古墳時代中期以降に起こった地震によるものと推定される。



写真17 6調査区 砂脈群31005検出状況
(北から)



写真18 7調査区 砂脈群31010検出状況
(南から)

砂脈群31011（写真19）

8調査区の北西隅のⅦ-18-1H地区で検出した。北壁の断面で観察されたものである。基本層序の第Ⅲ層上面まで噴き上がっている。上面は近世の水田作上により削平を受けていることから、地震が発生した時期は中世末期が想定される。

文献史料において、当該期の河内地域で震源が近く被害が大きかった地震としては、永正七年八月八日（1510年9月21日）と文禄五年閏七月一三日（1596年9月5日）がある。永正七年の地震は大阪東部を震源とするもので、剛琳寺（葛井寺）の本堂・塔をはじめとする伽藍の倒壊、西琳寺塔倒壊、常光寺の堂舎倒壊、四天王寺金堂本尊破壊・石鳥居の倒壊等の被害をあたえている。一方、文禄五年の地震は兵庫県南部を震源とするもので、京都市内の寺院・民家の他、特に普請中の伏見城の被害が大きかったため「慶長伏見地震」と呼ばれている。河内地域での被害も大きく、堺では死者が600人以上で、通りは人家・壁・屋根・寺院・その他の建物が倒壊したため塞がれて通行が出来なかったと記されている。大阪府東大阪市の水走遺跡においても、当該時期の地震痕跡が確認されており、報告者は文禄五年の地震に関連するものと考えられている。



写真19 8調査区 砂脈群31011検出状況
(南から)

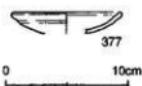
・第3—2面（古墳時代中期～後期）（第121図、図版四二・四三）

6調査区のみで検出した。6調査区の第2—1面から、0.1m前後掘り下げた第V層中のT.P.+7.6m前後で検出した。第2—1面の調査時点で捉えきれなかった平安時代後期の遺構を除けば、古墳時代中期～後期に比定される遺構が中心である。検出した遺構は、井戸1基（S E 32001）、土坑12基（S K 32001～S K 32012）、溝8条（S D 32001～S D 32008）、小穴48個（S P 32001～S P 32048）がある。

井戸（S E）

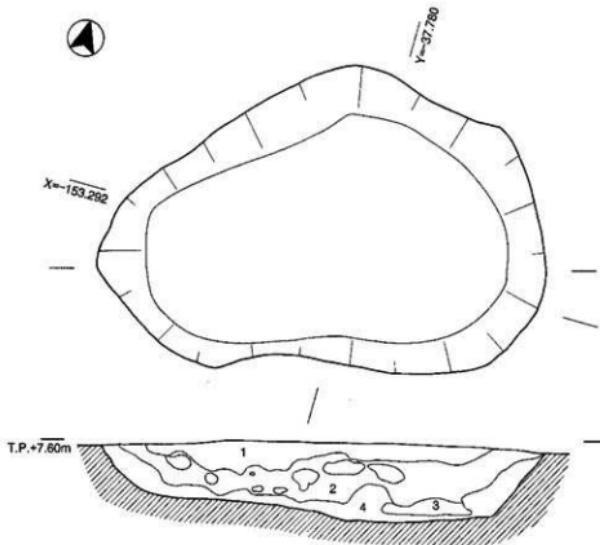
S E 32001（第119・120図、図版四三）

6調査区南東部のⅦ—13—10B区で検出した。不整な橢円形の平面をもつ井戸である。長径3.7m、短径1.8m、深さ0.63mを測る。断面の形状は、逆台形を呈する。埋土は4層で、2層中には粘土ブロックを非常に多く含んでいる。最下部は粗粒砂層に達しており、調査中においても湧水が認められた。埋土内から土師器、須恵器の小片が出土している。図化可能なものは土師器小皿1点（377）である。377は「て」の字状口縁の最終段階の形態を示す土師器小皿である。平安時代後期（12世紀前半）に比定される。



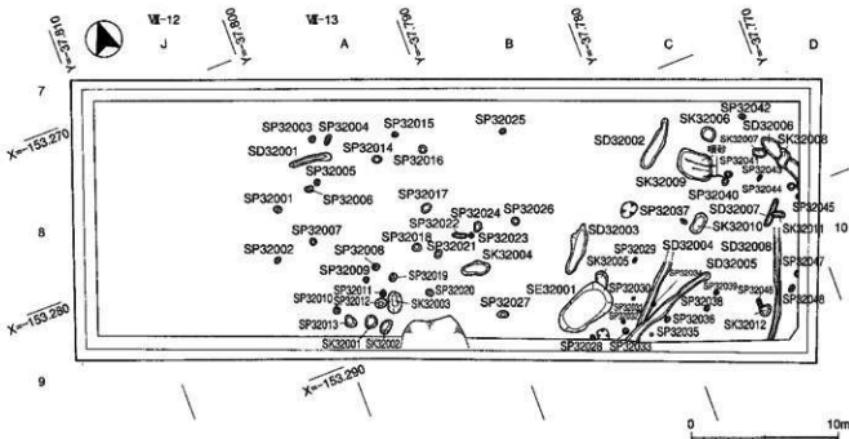
第119図 S E 32001

出土遺物実測図



- 1 SY6/2 灰オーリーブ色極細粒砂混シルト
- 2 10YR5/3 に富む黄褐色粘土（50% 塊状粘土のブロックを含む）
- 3 5B5/1 青灰色極細粒砂混シルト質粘土
- 4 2.5Y6/3 に富む黄色極細粒砂

第120図 S E 32001平面面図



第121図 第3-2面平面図 (24-6調査区)

土坑 (SK)

S K 32001 ~ S K 32012

土坑は、6調査区中央～東端にかけて合計12基検出した。掘方は不定形なものが多い。埋土は極細粒砂混粘土質シルトの水平堆積が中心である。S K 31001・S K 31006・S K 31008は、出土遺物から古墳時代後期（6世紀代）に比定される。また、S K 32002・S K 32005は、平安時代後期に比定される。各土坑の法量は、下記の第27表にまとめた。

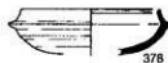
第27表 6調査区 第3-2面 S K 32001～S K 32012法量表

遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S K 32001	Ⅷ-13-9A	0.9	0.7	0.17	円形	土師器、須恵器
S K 32002	タ	1.0	0.6	0.11	椭円形	
S K 32003	タ	1.3	0.8	0.17	タ	土師器
S K 32004	タ	1.0	0.7	0.08	不整形	
S K 32005	Ⅷ-13-10B	1.1	0.7	0.06	椭円形	土師器
S K 32006	Ⅷ-13-9C	0.9	0.8	0.21	円形	土師器、須恵器
S K 32007	タ	0.8	0.5	0.12	椭円形	土師器
S K 32008	タ	1.2	0.5	0.08	不整形	土師器、須恵器
S K 32009	タ	2.1	1.6	0.17	隅丸方形	土師器
S K 32010	Ⅷ-13-9-10C	1.3	0.7	0.09	タ	
S K 32011	Ⅷ-13-10C	1.3	0.8	0.02	椭円形	
S K 32012	タ	0.8	0.6	0.10	隅丸方形	

溝 (SD)

S D 32001 ~ S D 32008

合計8条検出した。主に、南北方向に伸びるものが多い。溝の埋土は灰色極細粒砂混粘土質シルトの単一層が中心である。S D 32006は、埋土に炭化物を多量に含む。時期的にS D 32005・S D 32006は、須恵器の特徴から古墳時代中期（5世紀代）、S D 32004・S D 32007・S D



0 10cm

第122図 S D 32006出土
遺物実測図

32008は、古墳時代後期（6世紀末）とみられる。S D 32006から出土した須恵器杯身1点（378）を図化した。378は立ち上がりが内傾し端面に沈線を持つもので、受部は水平に伸びている。以上の特徴や器壁断面の色調は初期須恵器にみられる赤茶色を呈する点からT K 216型式（5世紀中葉）に比定される。各溝の法量は、下記の第28表にまとめた。

第28表 6調査区 第3-2面 S D 32001~S D 32008法量表

遺構番号	地区	全長(突出量)(m)	幅(最大)(m)	深さ(m)	断面形状	出土遺物
S D 32001	VII-13-8A	2.70	0.50	0.11	U字形	
S D 32002	VII-13-9C	0.80	0.80	0.13	長円形	土師器
S D 32003	VII-13-9B	3.20	1.00	0.12	U字形	土師器、須恵器
S D 32004	VII-13-10B-C	4.20	0.50	0.04	タ	土師器
S D 32005	タ	6.50	0.70	0.04	タ	土師器、須恵器
S D 32006	VII-13-9C-D	4.00	0.90	0.12	タ	土師器
S D 32007	VII-13-10C	1.80	0.30	0.04	タ	
S D 32008	タ	6.50	0.40	0.08	タ	土師器

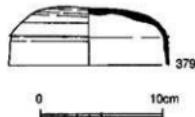
小穴・柱穴 (S P)

S P 32001~S P 32048 (図版四三)

小穴は、合計48個確認した。小穴の分布は、調査区の中央から東にかけてみられる。掘方の形状は、円形か楕円形である。小穴ごとの規則的な配列は確認できなかった。埋土は、粘土質シルトの單一層が多い。S P 32040は、炭化物を多く含む。小穴は、出土遺物が少なく帰属時期が明確でないものが多いがS P 32001・S P 32040・S P 32041内出土の須恵器の特徴などから古墳時代中期（5世紀代）とみられる。S P 32040から出土した須恵器杯蓋1点（379）を図化した。379はほぼ完形で口径13.2cm、器高4.8cmを測る。T K 208型式（5世紀中葉）に比定される。各小穴の法量は、下記の第29表にまとめた。

第29表 6調査区 第3-2面 S P 32001~S P 32048法量表

遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 32001	VII-12-8J	0.50	0.40	0.11	円形	土師器、須恵器
S P 32002	VII-12-9J	0.40	0.30	0.14	楕円形	
S P 32003	VII-13-8A	0.48	0.35	0.15	円形	埴輪(?)
S P 32004	タ	0.65	0.30	0.11	楕円形	
S P 32005	タ	0.35	0.35	0.11	円形	
S P 32006	タ	0.50	0.30	0.17	楕円形	
S P 32007	VII-13-9A	0.40	0.40	0.17	円形	
S P 32008	タ	0.50	0.40	0.28	楕円形	
S P 32009	タ	0.35	0.35	0.09	円形	
S P 32010	タ	0.40	0.40	0.19	タ	
S P 32011	タ	0.50	0.35	0.18	楕円形	
S P 32012	タ	0.70	0.60	0.24	タ	
S P 32013	タ	0.70	0.60	0.18	不整円形	
S P 32014	VII-13-8A	0.50	0.45	0.22	楕円形	
S P 32015	タ	0.35	0.35	0.14	タ	
S P 32016	タ	0.50	0.50	0.21	タ	
S P 32017	VII-13-9A	0.65	0.50	0.18	タ	
S P 32018	タ	0.60	0.50	0.21	タ	
S P 32019	タ	0.55	0.35	0.13	タ	上師器
S P 32020	タ	0.45	0.40	0.13	タ	
S P 32021	タ	0.50	0.45	0.19	タ	



第123図 SP32040出土
遺物出土遺物

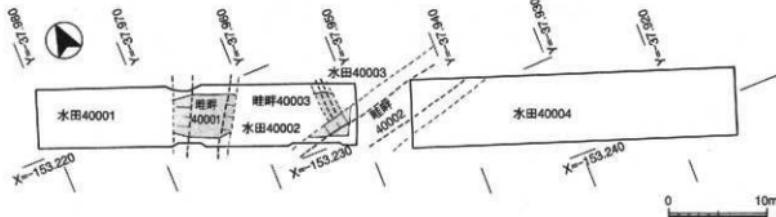
遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物
S P 32022	VII-13-9A	1.00	0.30	0.07	楕円形	
S P 32023	タ	0.30	0.30	0.05	円形	
S P 32024	VII-13-9B	0.70	0.45	0.07	楕円形	
S P 32025	タ	0.40	0.30	0.13	タ	
S P 32026	タ	0.45	0.45	0.06	円形	
S P 32027	VII-13-10A・B	0.60	0.40	0.20	楕円形	
S P 32028	VII-13-10B	0.30	0.25	0.11	タ	
S P 32029	タ	0.35	0.20	0.06	タ	
S P 32030	タ	0.20	0.20	0.05	円形	
S P 32031	タ	0.15	0.15	0.04	タ	
S P 32032	タ	0.25	0.15	0.05	楕円形	
S P 32033	タ	0.35	0.35	0.05	円形	
S P 32034	タ	0.30	0.30	0.05	タ	
S P 32035	タ	0.20	0.20	0.03	タ	
S P 32036	タ	0.35	0.30	0.07	楕円形	
S P 32037	VII-13-9C	0.45	0.20	0.07	タ	
S P 32038	VII-13-10C	0.35	0.30	0.08	タ	
S P 32039	タ	0.30	0.30	0.08	円形	
S P 32040	VII-13-9C	0.45	0.35	0.07	楕円形	須恵器 (TK208型式)
S P 32041	タ	0.50	0.35	0.05	タ	須恵器、製塩土器
S P 32042	タ	0.40	0.30	0.14	タ	土師器
S P 32043	タ	0.40	0.20	0.04	タ	
S P 32044	タ	0.40	0.40	0.04	円形	
S P 32045	VII-13-10C	—	0.30	0.02	タ	
S P 32046	タ	0.50	0.25	0.09	タ	土師器、須恵器
S P 32047	タ	0.40	0.40	0.08	タ	
S P 32048	タ	0.50	0.25	0.05	楕円形	

・第4面（古墳時代初頭～前期）（第124図、写真20・21、図版四四・四五）

1～3調査区の管路敷設部分を対象とした下部調査で、T.P.+5.7m付近に存在する23～25層を作土とする古墳時代初頭後半～前期前半（庄内式期新相～布留式期古相）に比定される水田4筆（水田40001～水田40004）、畦畔3条（畦畔40001～畦畔40003）を検出した。

水田造構はいずれも壁面観察で存在を確認したもので、4筆を検出しており、畦畔40001より西側を水田40001、畦畔40001～畦畔40003に区画されたものを水田40002、畦畔40002と畦畔40003で区画されたものを水田40003、畦畔40002より東側を水田40004と呼称した。水田上面の標高は、水田40001がT.P.+5.8m、水田40004がT.P.+5.6mで西側から東側に向かって低くなっている。作土層は23層～25層がそれに該当し、長期間の使用が想定される。

畦畔は3条（畦畔40001～畦畔40003）が検出されており、そのうち、畦畔40001・畦畔40002が



第124図 第4面検出遺構平面略図 (S = 1/500)

大畦畔で、畦畔40003は畦畔40002に取り付く小畦畔である。畦畔40001は南北方向に伸びるもので、水田40001と水田40002を区画している。断面のみの検出であるため不明な点が多いが、畦畔50001の西部を中心に盛土を行って規模を拡大しており、基底幅2.5m、上面幅0.3m、高さ0.4mを測る。2調査区の南東隅で検出した畦畔40002は、畦畔50002の上部に拡張された部分で、検出部分で基底幅2.6m以上、上面幅2.1m以上、高さ0.45mを測る。畦畔40002は東接する3調査区の北西部で約7mが確認されており、東西方向に伸びるものと推定される。遺物は畦畔40001および畦畔40002の盛土内および水田40001作土中から、古墳時代初頭後半～前期前半（庄内式期新相～布留式期古相）に比定される庄内式甕等の小片が少量出土している。なお、水田40004の作土である23層（3調査区西部地点）で実施したプラントオパール分析によれば、イネ属の出現率が高いことが確認されている。

・第5面（古墳時代初頭）（写真20・21、図版四四～四六）

第4面と同様、1～3調査区の下部調査の断面観察で水田4筆（水田50001～水田50004）、畦畔3条（畦畔50001～畦畔50003）を検出した。

水田はT.P.+5.4m前後に存在する27層を作土とするもので、4筆を検出した。畦畔50001より西部が水田50001、畦畔50001と畦畔50002の間が水田50002、畦畔50001と畦畔50003の間が水田50003、畦畔50003より東が水田50004と呼称した。2調査区で検出した畦畔50001は中央部分が溝により削平を受ける大畦畔で、検出部分で基底幅6.0m、上面幅3.5m、高さ0.7mを測る。上部の西側には盛土により畦畔40001が構築されている。畦畔50002は畦畔50001の東約9.0mに位置する。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、基底幅2.0m、上面幅1.7m、高さ0.65mを測る。上部および西部が拡張され畦畔40002が構築されている。畦畔50003は3調査区で検出した。27層を台形状に構築するもので、基底幅4.5m、上面幅3.0m、高さ0.15mを測る。遺物は出土していないが、上面に存在する第4面検出の水田の時期から勘案して、構築時期は古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）以前が考えられる。なお、水田50003の作土を構成する27層（3調査区西部地点）で実施したプラントオパール分析によれば、イネ属の出現率が高いことが確認されている。



写真20 2調査区 畦畔40001・畦畔50001
南壁検出状況（北から）

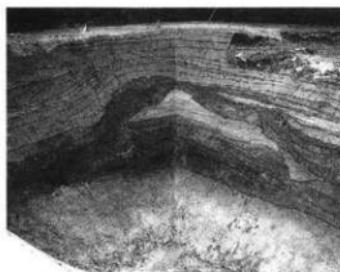
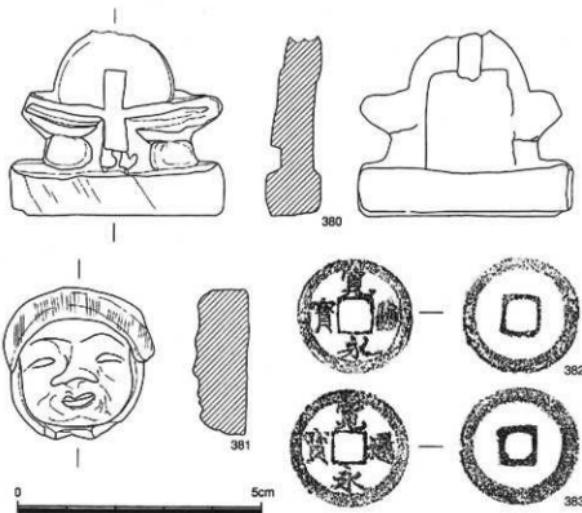


写真21 2調査区 畦畔40002・畦畔50002
南壁・東壁検出状況（北西から）

2) 遺構に伴わない遺物

第Ⅱ層出土遺物（第125図、図版六九）

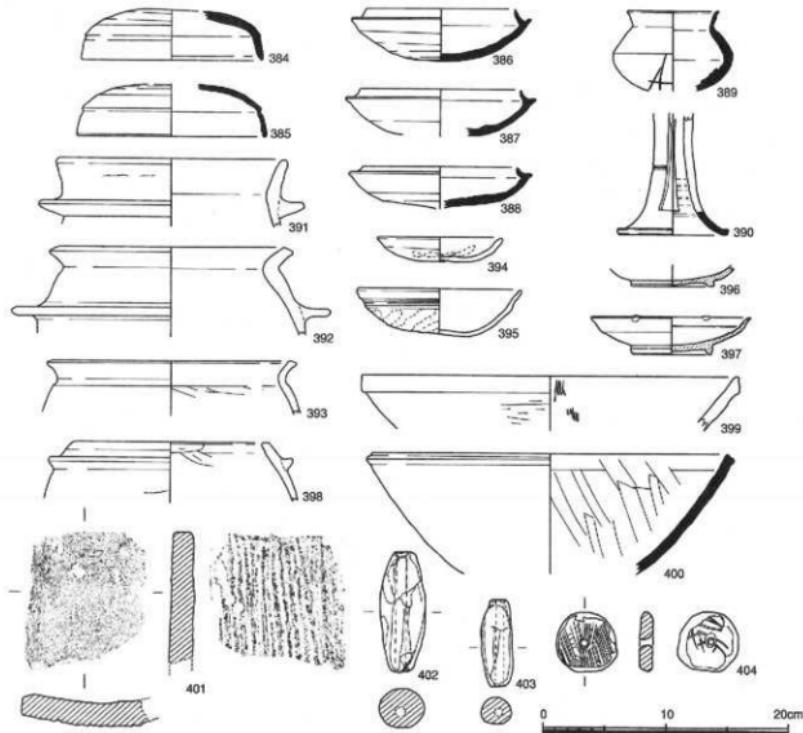
4点（380～383）を図化した。380・381は共に型作りによる土人形である。380は天神の坐像で、頭部を欠く。381は大黒の顔部を表現している。共に、江戸時代中期（18世紀代）の所産と考えられる。前者が3調査区VII-11-5 H・I地区、後者が4調査区VII-11-5 J地区からの出土である。382・383は銅鏡の寛永通宝で、無背鏡である。寛永通宝の分類では「新寛永」の3期（1697～1747年、1767～1781年）に分類される。共に、出土地点は4調査区南東部のVII-12-6 B地区にあたる。この部分では、竜華操車場の設置で寸断された久宝寺村と竜華町をつなぐ道路状遺構が検出されており、2点もこの道路状遺構部分から出土したものである。



第125図 第Ⅱ層出土遺物実測図

第Ⅲ層出土遺物（第126図、図版七〇）

21点（384～404）を図化した。384・385は須恵器杯蓋である。共にTK10型式（6世紀中葉）に比定される。出土地点は共に7調査区で、384がVII-18-2 G地区、385がVII-18-2 H地区である。386～388は須恵器杯身である。そのうち、386がほぼ完形であるが、口縁部の歪みが顕著である。386・387はTK43型式（6世紀末）～TK209型式（7世紀前半）に比定される。出土地点は、386が5調査区のVII-12-7 I地区、386・387が4調査区のVII-12-5 C地区である。389は須恵器の小形壺の小片である。体部外面にヘラ記号がある。6世紀後半の所産と考えられる。7調査区のVII-13-10 D地区出土。390は1段スカシを有する須恵器高杯である。6世紀前半の所産である。7調査区のVII-13-10 E地区出土。391は土師器土釜の小片である。飛鳥時代前半（7世紀前半）のものか。5調査区のVII-12-6・7地区出土。392は口縁部が「く」の字に屈曲する



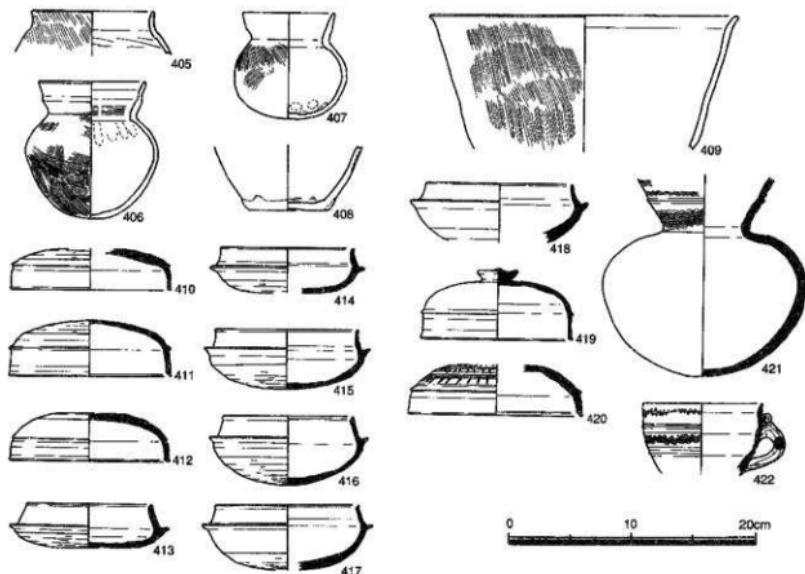
第126図 第Ⅲ層出土遺物実測図

土師器土釜の小片である。平安時代後期（12世紀前期）の所産か。5調査区のⅦ-12-8 I 地区出土。393は土師器壺の小片である。平安時代中期（10世紀後半）の所産か。5調査区Ⅶ-12-6・7 E 地区出土。394は土師器小皿で完形である。口径10.2cm、器高1.8cmを測る。平安時代後期の所産である。5調査区のⅦ-12-8 H 地区である。395は土師器杯で口縁部の一部を欠く以外は完存している。口縁部が強いヨコナデにより体部との境を明瞭にしている。平安時代前期末～中期前半（10世紀前半～中葉）の所産である。396・397は緑釉陶器小皿で、397は一部口縁部を欠く以外は完存している。397は輪花皿に分類されるもので、口径13.2cm、器高3.0cmを測る。2点共に高台部裏面より内側面を除く部分に施釉されており、釉色は396が黒緑色、397が緑灰色である。特徴から平安京の近郊で生産された京都系の緑釉陶器と推定される。時期は平安時代前後半（9世紀後半）に比定される。396が3調査区Ⅶ-11-4 F・G 地区。397が5調査区Ⅶ-12-7 地区出土。398は瓦器三足釜である。鎌倉時代後半（13世紀末）前後のものか。7調査区のⅦ-13-10 F・G 地区出土。399・400は鉢で、399が瓦質の摺鉢、400は須恵器の捏鉢である。400は東播系のものである。平安時代後期後半（12世紀中葉）の所産である。399が2調査区のⅦ-11-

2・3 C 地区。400が5調査区のⅦ-12-7 G 地区出土。401は平瓦で凹面に布目痕、凸面に粗い縄目痕が残る。5調査区のⅦ-12-7 I 地区出土。402・403は管状土錘で共に完形品である。402が大形で長さ10.0cm、最大径3.6cm、403は小形品で長さ7.0cm、最大径2.5cmを測る。2点共に5調査区のⅦ-12-7 地区出土。404は須恵器片を加工した紡錘車である。5調査区のⅦ-12-7 H 地区出土。

第IV層出土遺物（第127図、図版七〇）

18点（405～422）を図化した。405は口縁部が直上方に向て短く伸びる短頸壺の小片である。8調査区のⅦ-18-2 H 地区出土。406は複合口縁の小形壺である。完形品で口径8.8cm、器高11.3cmを測る。古墳時代前期後半（布留式期新相）のものか。407は小形丸底壺で1/2以上が残存している。全体にやや雜な作りである。古墳時代前期～中期初頭に比定されよう。406・407共に6調査区のⅦ-13-8 A 地区出土。408は韓式系土器に分類される小形平底鉢の小片である。外表面は器面の剥離が顕著であり、調整は不明瞭である。古墳時代中期中葉（5世紀中葉）の所産と考えられる。3調査区のⅦ-11-3・4 H 地区出土。409は土師器の甑の小片である。体部外面は縱方向のハケを施す。時期的には、408と同時期か。8調査区のⅦ-18-2 H 地区出土。410～412は須恵器杯蓋である。410は天井部が低く稜が鋭いもので、TK216型式（5世紀前半）に比定される。3調査区のⅦ-11-2・3 G 地区出土。411は半還元焰焼成によるもので、内面および器壁面の色調は赤褐色を呈する。TK23型式（5世紀後半）に比定される。8調査区のⅦ-18-2 H 地区出



第127図 第IV層出土遺物実測図

土。412は口縁部が1/12程度の小片である。初期須恵器の範疇に含まれるものと推定される。8調査区のⅧ-18-2 H地区出土。須恵器杯身は6点(413~418)を図化した。413は完形に近いもので、底体部が非常に浅い。414も底体部が浅いもので、口縁端部が水平な面を持って終わる。413・414共にON46型式(5世紀中葉)に比定される。415~417は外上方に伸びる受部から立ち上がりが内傾して伸びるもので、口縁端部は内傾し段を有する。TK23型式に比定される。残存率は415・416が1/2以上、417が1/4程度。418は1/8程度の小片である。口縁端部が丸く、体底部の器壁が厚い。TK216型式に比定される。413~417が8調査区のⅧ-18-2 H地区出土。418が3調査区のⅧ-11-3 G地区出土。419・420は須恵器有蓋高杯の蓋である。419は径3.2cmを測るつまみを有するもので、天井部全体に灰かぶりが認められる。8調査区のⅧ-18-2 H地区出土。420はつまみ部を欠損する。天井部に2条の櫛書き直線文の間に刺突文を施す。7調査区のⅧ-13-10 D地区出土。421は須恵器壺で、体部が完存している。口縁部中位の凸帯の上下に沈線文が施文されている。2調査区のⅧ-11-3 E地区出土。422は須恵器の把手付椀である。口縁部外面および体部外面中位の2条の凸帯間に波状文が施文されている。3調査区のⅧ-11-4 H・I、5 H地区出土。

参考文献

・弥生土器

寺沢 薫・森井貞雄 1989「1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編1』木耳社

・土師器

原田昌則 1993「第5章 まとめ 3) 中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」「II久宝寺遺跡(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告37

辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』大阪大学考古学研究室

・埴輪

川西宏幸 1978「円筒埴輪叢論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会

・須恵器

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

1981『須恵器大成』角川書店

伊野近富 1990「錦窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報 第37号』京都府埋蔵文化財調査研究センター

石井清司 1995「土器・陶磁器 5.錦窯須恵器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編

・古代～中世の土師器

奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II」奈良国立文化財調査研究所学報第32号

古代の土器研究会編 1992「古代の土器 I 都城の土器集成」

古代の土器研究会編 1993「古代の土器 II 都城の土器集成」

近江後秀・岡田清一 1989「河内南部における古代末期から中世の土器の諸問題ー木の本遺跡 SW-02出土遺物を中心としてー」『八尾市文化財紀要4』八尾市教育委員会文化財室

佐藤 隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告V』(財)大阪市文化財協会

・中国産磁器

横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶器研究会

・綠釉陶器

高橋照彦 1995「Ⅲ土器・陶磁器 3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編

三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館 1990 第9回 三重県埋蔵文化財展「緑釉陶器の流れ」

・黒色土器

橋本久和 1986「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会

・瓦器椀

川越俊一 1982「大和地方の瓦器をめぐる二三の問題」『文化財論集』奈良文化財研究所創立30周年記念論集

尾上 実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集「古文化論叢」』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

森島康雄 1992「畿内産瓦器椀の併行関係と層年代」『大和の中世土器II』大和古中近研究会

・土釜

森島康雄 1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会

菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良國立文化財研究所創立30周年記念論文集

・備前焼

間壁忠彦・岡壁茂子 1966~68・84 「備前焼ノート」1~5 『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18号

・東播系須恵器

丹治康明 1985「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会

・銭貫

水井久美男 1996「日本出土銭總覧」兵庫県銭調査会

・井戸

宇野隆夫 1982「井戸考」『史林 65巻5号』史学研究会

・地震跡

寒川 旭 1992『地震考古学』中公新書1096 中央公論社

勝田邦夫 1988「水走遺跡にみられる地震の痕跡」『東大阪市文化財協会ニュースVol. 3 No. 3』財団法人東大阪市文化財協会

・地層、地質

藤岡達也・坂本隆彦・森山義博 1999「河川堆積物の教材化について—大和川の河川堆積物を例として—」『大阪と科学教育13』大阪府教育センター

第4章　まとめ

今回実施した久宝寺遺跡第24次の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地を中心とする大阪竜華都市拠点地区の基盤整備事業に伴う新設道路予定地（竜華東西線）を調査対象としたものである。調査の概要でも一部述べたように、今回の調査対象地は東西方向に長く、しかも調査区毎に掘削深度に差異があり、その対象となる時期も一定ではない。特に、3調査区東部から7調査区の中央部にかけての上部調査においては、古墳時代中期前半以降に比定される遺構の大半が洪水砂層上に構築されており、さらに近世以降は中河内地区特有の「鳥畑」と呼ばれる田畠混在の耕地面積の変化に伴って大規模な地層の改変が随所で行われており、同一面で捉えたなかでも、比較的長期間にわたる遺構が検出されることが多かった。8面（第1—1面～第5面）における調査の結果、古墳時代初頭前半（庄内式期古相）～近代に至る遺構・遺物が検出されている。

ここでは、今回の発掘調査で得られた考古学的・地質学的な知見を旧国鉄の竜華操車場跡地および周辺で実施された既往調査成果を含めて、古墳時代初頭前半（庄内式期古相）以降の集落推移を概観してみる。

・古墳時代初頭前半～前期前半（庄内式期古相～布留式期古相）

当該期の遺構としては、1調査区～3調査区の下部調査で検出された2面（第4面・第5面）の水田遺構がある。これらの水田遺構は、3調査区東部から7調査区の中央部にかけて検出された自然河川の西部に展開する後背湿地上に立地している。第5面で検出した水田遺構が古墳時代初頭前半～後半（庄内式期古相～新相）、第4面で捉えた水田遺構が古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される。なお、1調査区に西接する位置で（財）大阪府文化財調査研究センターにより実施された99-1～5トレンチでは、不規則な小溝群を主体とする畑作に関連した耕作畠溝群が2面にわたって検出されている。これら両調査地の当該期の微地形は、西側から東側に向かって下がっており、西側の緩傾斜面を呈する（財）大阪府文化財調査研究センターによる調査部分が畠地、東側の谷状地形を呈する本調査地の1調査区～3調査区付近が水田として利用されている。そのうち、第5面で検出した古墳時代初頭前半～後半（庄内式期古相～新相）の水田については、（財）大阪府文化財調査研究センター調査の99-4・5トレンチおよびその南で行われた第34次（KH2000-34）で検出されている居住域に伴うものと推定され、居住域東方の東西250m以上にわたって水田と畠が混在する生産域が形成されていたことが推定される。一方、第4面で検出された水田に伴う居住域については、西方では第34次（KH2000-34）がある他、南方約400m地点の跡部本町1丁目で八尾市教育委員会が行った調査（92-164）があるが、検出遺構の密度等を考慮すれば前者が有力と考えられる。

4・5面で検出された生産域に関わる墓域としては、生産域に近接する位置で検出された（財）大阪府文化財調査研究センター調査の99-3・4トレンチの方形周溝墓1基、北方の第23次（KH97-23）9・10調査区で検出された方形周溝墓2基が第5面で検出した生産域と有機的な関係を持つことが推定される。第4面の生産域に関わるものとしては、第23次（KH97-23）14調査区で土器棺墓2基、第28次（KH99-28）2調査区で方形周溝墓2基が検出されており、生産域に近接する位置や生産域の北側に墓域を設ける点で2時期の共通点がみられる。

・古墳時代前期後半（布留式期新相）

遺構としては確認されていないが、4調査区東部～7調査区西部の下部調査で確認された2条の自然河川（N R 31002・N R 31003）に関連した洪水砂層の最上面を中心に、当該期の完形品を多く含む比較的良好な土器類が4調査区～6調査区を中心に多量に出土している。これらの事実からは調査区の南部一帯に当該期の集落が存在した可能性が示唆されるとともに、出土土器類の中ではローリングを受けない完形の小形丸底壺の占める比率が高いことから、自然河川の周辺において何らかの祭祀的な行為が行われた可能性が考えられる。

・古墳時代中期

古墳時代中期の遺構は、各調査区にわたって広がりをみせた古墳時代前期後半（布留式期新相）迄に埋没した自然河川に関連する洪水砂層および水成層上面で検出されている。中期前半～中葉の居住域に関連する遺構は2～4・6～8調査区で検出されている。この時期においては3調査区東部～4調査区中央部で検出されたN R 31001が機能しており、北方の下流部分にあたる地点で（財）大阪府文化財調査研究センター調査の95-8・9トレンチ、96-1トレンチ、97-1トレンチで検出された堰1・堰2を中心とした河川管理や一定水量の確保が集落の拡大を促進した要因であったと推定される。6・7調査区一帯が当該期の居住域の中核を成しており、堅穴住居・掘立柱建物を中心として、炊事および作業場的な役割を果たした土坑群が付随して配置されている。N R 31001の埋没や堰機能の停止した中期後半の居住域は2・3・6・7調査区で検出されている。中期後半の河川は2調査区で検出されたS D 31014が推定され、北西に接する第28次（K H99-28）2調査区で検出された河川へ続くものと考えられる。なお、中期後半の遺構は、8調査区北方の第23次（K H97-23）の24調査区・25調査区および第29次（K H99-29）1調査区で検出されており、本調査地を含めて東西約200mの範囲に遺構の分布が認められる。中期前半～後半の生産域としては、第28次（K H99-28）1調査区で検出された水田遺構があり、概ね居住域の北西部を中心て展開したことが推定される。墓域としては、生産域を検出した北西部の第28次（K H99-28）2調査区で方墳が検出されている他、東に接する第33次（K H2000-33）では古墳の存在が示唆される勾玉・臼玉が出土しており、この付近に墓域が存在した可能性がある。一方、出土遺物については、土師器・須恵器・製塙土器・韓式系土器等の土器類の他、滑石製勾玉等の石製品が出土している。韓式系土器については、当該期の中河内地区の集落では普遍的に認められるもので、久宝寺遺跡内の既往調査においても多数の出土例が報告されているが、本調査においては8調査区のS K 31081から外面に繩蓆文を施す壺2点が出土している以外は小片で量的には僅少であった。

・古墳時代後期～飛鳥時代

古墳時代後期～飛鳥時代前半の遺構は、6世紀前半のものが2・3・6・7調査区で、6世紀中葉のものが2・5・6調査区で、6世紀後半～7世紀初頭の遺構が5・6調査区で検出されている。なお、4調査区に北接する（財）大阪府文化財調査研究センターによる98-1トレンチの調査では、横穴式石室を主体部に持つ七ツ門古墳（6世紀中葉）が検出されており、大阪市の長原遺跡で検出された七ノ坪古墳（6世紀前半）と共に当該期の平野部における墓制の在り方を考えるうえで示唆的である。なお、古墳時代後期の居住域は北方ないしは北東に接する第23次（K H97-23）の17調査区、22調査区～25調査区および第33次（K H2000-33）で検出されており、5

世紀代の集落分布にはほぼ符合した形で推移したことが推定される。飛鳥時代の遺構は北方ないしは北西方で実施された(財)大阪府文化財調査研究センターの95-8トレンチ、第28次(KH99-28)1~3調査区で検出されている。遺構以外では、地震の痕跡を示す噴砂跡(砂脈)が検出されている。地震痕跡については、4調査区以東の調査区で検出された他、既往調査においても現久宝寺駅以東の調査区で検出されている。その中でも、4調査区で検出された地震痕跡はこれまでに検出されたなかで最大級のもので、「日本書紀」に記された天武十三年(684)の地震(白鳳南海地震)に対応する可能性が高く、北接する地点で検出された七ツ門古墳(6世紀中葉)の横穴式石室の崩壊もこの地震によるものと推定される。

・奈良時代

当該期の遺構としては、3調査区で奈良時代中期の井戸が1基(S E21003)検出された程度である。一方、調査地に近接する北方ないしは北東側で実施された第23次(KH97-23)の18調査区~26調査区および第33次(KH2000-33)の広範囲にわたって当該期の遺構分布が認められ、その付近一帯が居住域の中心の一角を占めていたものと考えられる。

・平安時代前期~中葉

1・3・5~8調査区で居住域を構成する掘立柱建物・井戸・土坑等が検出されている。前期前半(9世紀末~10世紀前半)の遺構は、1・3・5・7・8調査区の広範囲にわたって遺構の分布がみられる。その中でも、掘立柱建物22001が検出された1調査区や井戸枠に須恵器の大甕を使用したS E21002が検出された3調査区を中心とした西部一帯が居住域の中心であったと推定される。同時期の集落が第23次調査の15調査区・16調査区で検出されている。なお、前代の集落が第23次(KH97-23)の18調査区~26調査区および第33次(KH2000-33)を中心に検出されていることから、平安時代前期に集落域が西側に移動したことが窺える。8調査区および東接する第29次(KH99-29)1調査区で検出された生産遺構に伴う東西および南北方向に伸びる溝遺構については、条里遺制の区画に沿ったもので、渋川郡条里の施行時期を知るうえで貴重である。特筆すべき遺物としては、3・5調査区から縁釉陶器皿(9世紀後半)が出土しており、これらの集落を構成していた集団の性格を知るうえで示唆的である。

・平安時代後期

5・6調査区で居住域を構成する遺構群が検出されている。11世紀後半~12世紀前半にかけての遺構が認められるが、遺構の分布は散発的である。同時期の集落は北方の第23次(KH97-23)の17調査区・19調査区・26調査区で検出されている。

・鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は4調査区で検出されているものの、生産域を構成する小溝等が中心である。既往調査においても、(財)大阪府文化財調査研究センター(98-1トレンチ)等で鳥畠・畦畔・溝等を中心とした生産域に関連した遺構が検出された程度で当該期の居住域は検出されていない。なお、4調査区の東端部分では旧国鉄の竜華操車場で寸断された南北に走る道路(道路状遺構12001)が検出されている。この道路については、北部に位置する(財)大阪府文化財調査研究センターの95-8・9トレンチ、96-1トレンチ、97-1トレンチで検出されており、本調査の成果と同様、鎌倉時代に遡る可能性が示されている。

・室町時代～近世

室町時代の遺構は7調査区でSE21005(16世紀後半)が検出されている以外は前代と同様、生産域を構成する小構群が検出されている程度である。遺構以外では、4調査区で慶長九年(1605)に発生した「慶長南海地震」によるものと推定される噴砂跡(砂脈)が検出されている。近世初頭以降も一貫して生産域としての土地利用が行われており、近世中葉以降は「河内木綿」に代表される、綿花栽培の普及に伴って島畑が構築されており、山畑混在の耕地面積に変化をしている。調査においては、3調査区以東の調査区において「島畑」が検出されている。

註記

- 註1 西村歩・酒井泰子 2000『平成10・11年度久宝寺遺跡(竜華東西線)発掘調査終了報告』(財)大阪府文化財調査研究センター 内部資料 西村歩氏のご好意により資料の提供を受けた。正報告と内容が異なる場合は筆者に責がある。

<参考文献>

- ・酒井倶 1993「16.跡部遺跡(92-164)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告27 平成4年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・本間元樹他 1996「八尾市龜井・浜川所在 久宝寺遺跡・竜華地区 試掘調査報告書」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第5集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・後藤信義・本山奈津子 1996「久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書 - JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う-」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・藤井淳弘・吉田珠己 1997「7.久宝寺遺跡(95-565)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書II』八尾市文化財報告37 八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1998「9.久宝寺遺跡第22次調査(KH97-22)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・岡田清一・古川晴久・樋口薫・吉田珠己 1998「10.久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・後藤信義・島崎久恵・長田芳子 1998「八尾市浜川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II -一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査-」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第26集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書III」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・高井健司 1987「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-23)略報」『昭和60年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会
- ・寒川旭 1992『地震考古学』中公新書1096 中央公論社
- ・西村公助・岡田清一 2000「11.久宝寺遺跡第28次調査(KH97-28)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一・岡田清一・酒井泰子・小川裕子 2001「2.久宝寺遺跡第29次(KH99-29)調査」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子・樋口薫・金親満夫 2001「4.久宝寺遺跡第33次(KH2000-33)調査」『平成12年度(財)八尾市文化財調

- 査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・清 浩 2001「5.久宝寺遺跡第34次(KH2000-34)調査」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)
八尾市文化財調査研究会
・大野 薫 1989「扇煙の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例－』『郵政考古紀要15』郵政考古学会

図 版

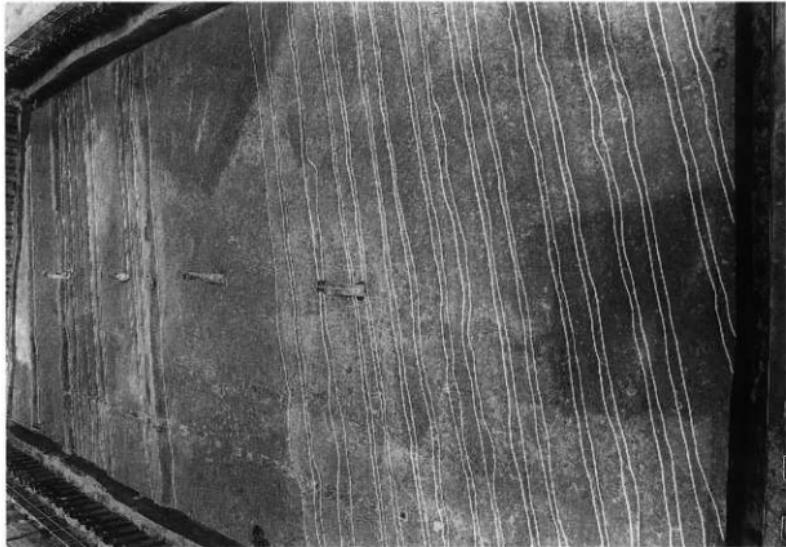


調査区からの遠景（24—7 調査区より東を望む）

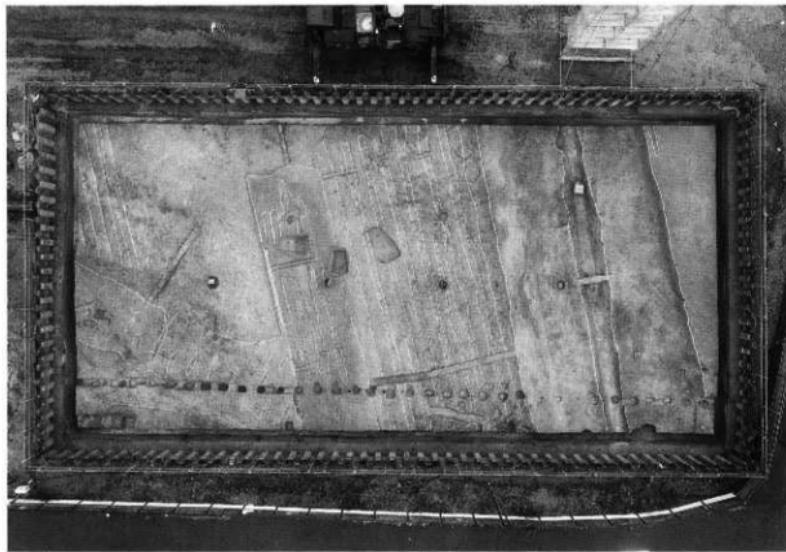


調査区からの遠景（24—3 調査区より西を望む）

図版二 (第1—1面)



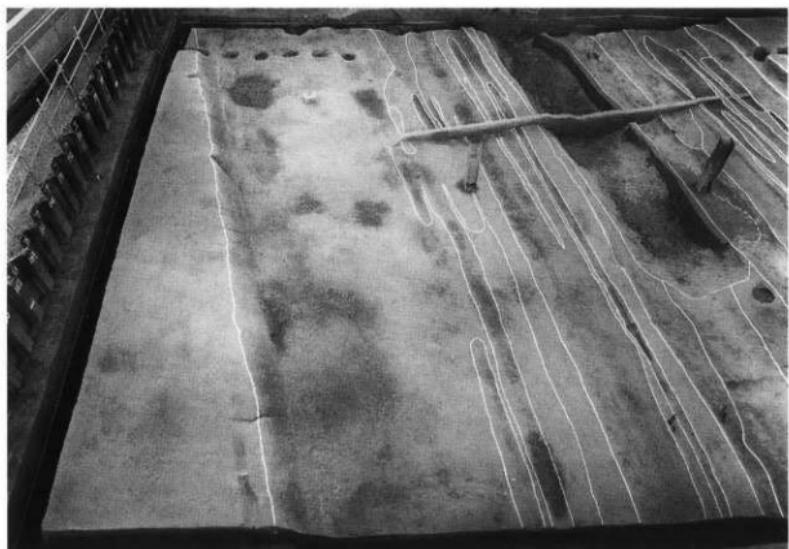
24-3 調査区 全景（東から）



24-4 調査区 全景（上が北）
(但し南西部の道路状造構は平面図から除外している)



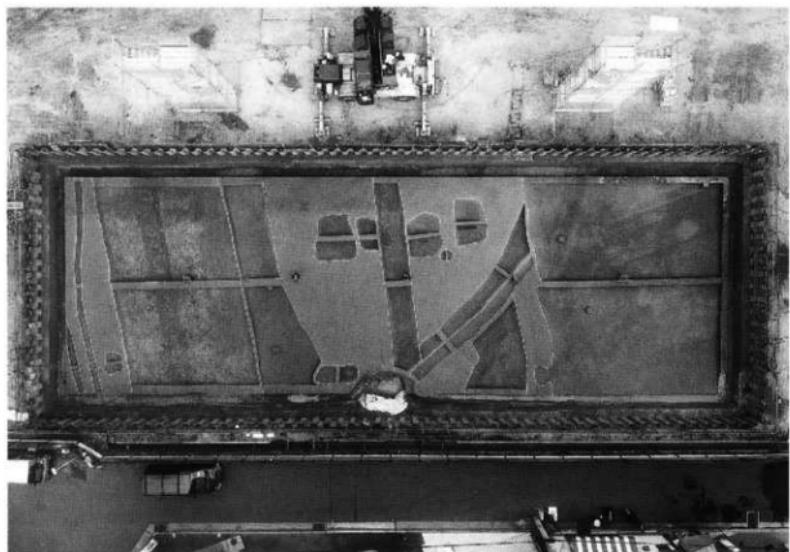
24-4 調査区 全景（西から）



24-4 調査区 東部（北から）



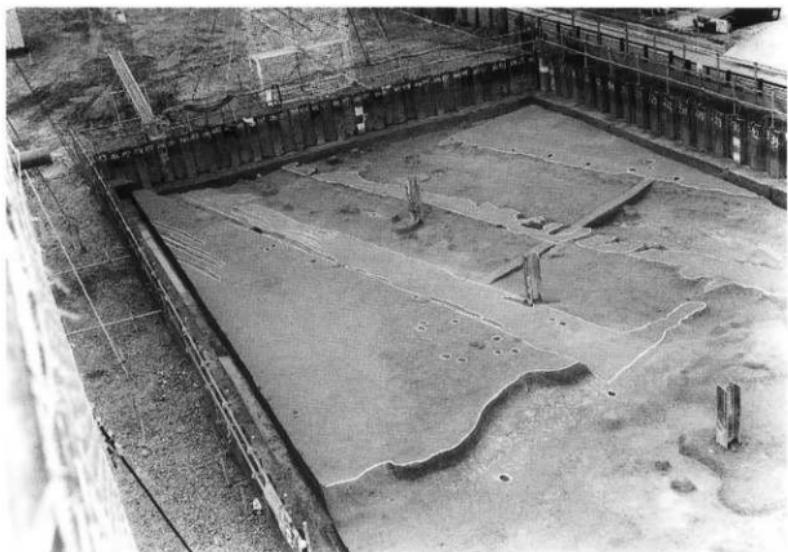
24-5 調査区 全景（西から）



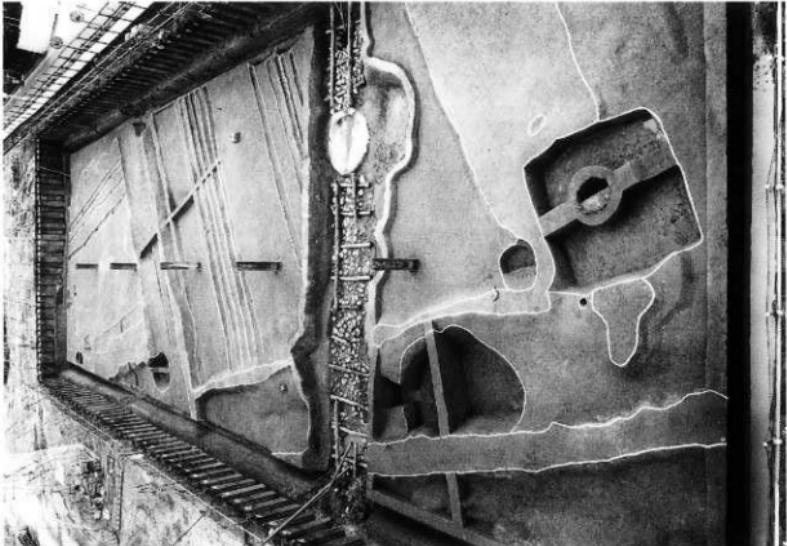
24-6 調査区 全景（上が北）



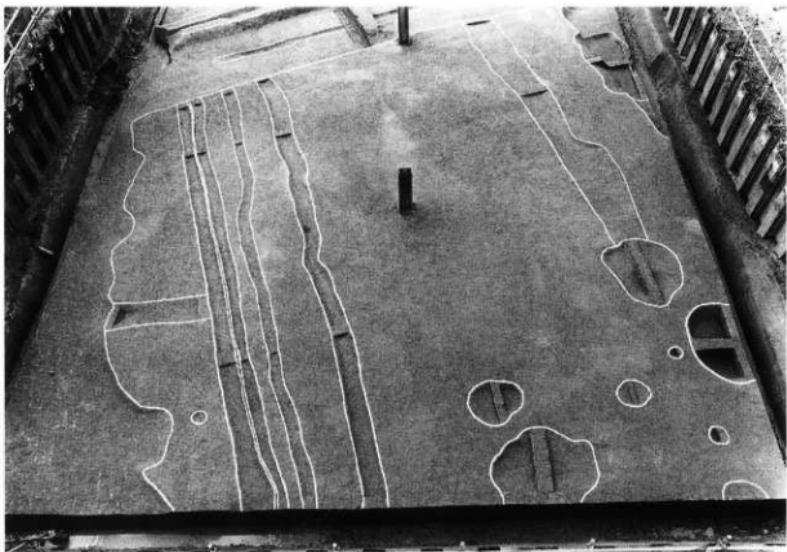
24-7 調査区 全景（西から）



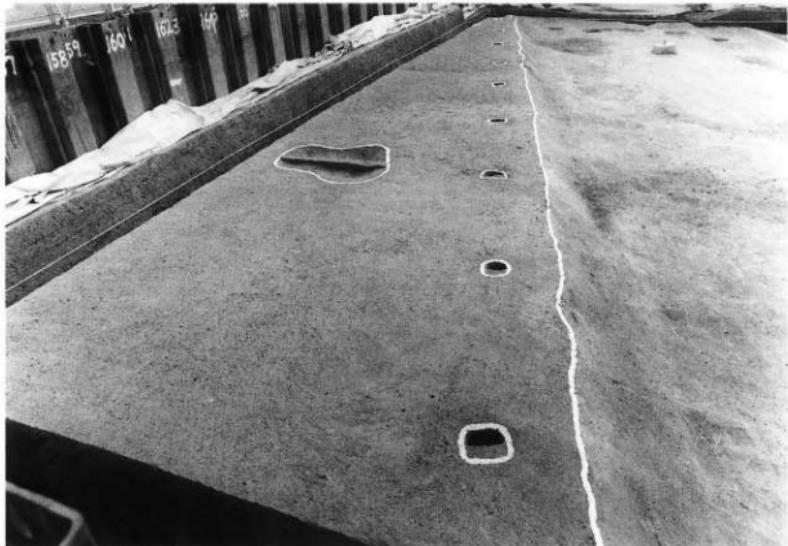
24-7 調査区 東部（北西から）



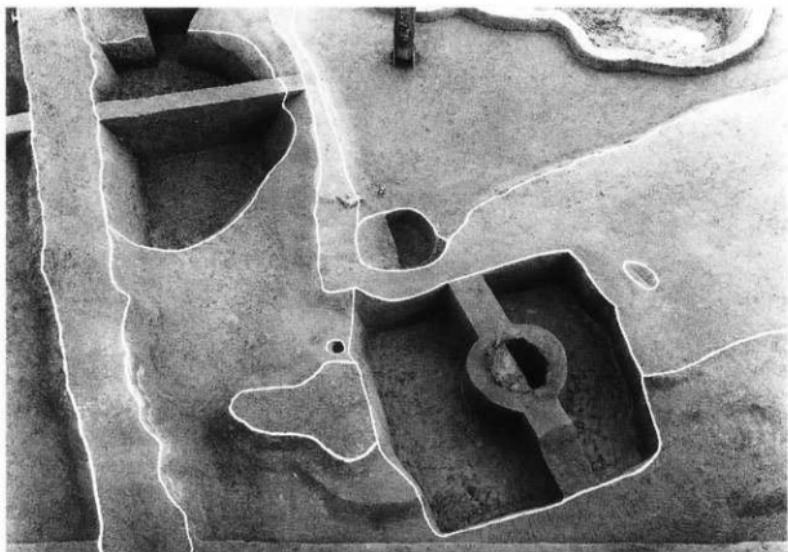
24-8 調査区 全景（西から）



24-8 調査区 東部（東から）



24-4 調査区 島畑12002検出状況（北から）



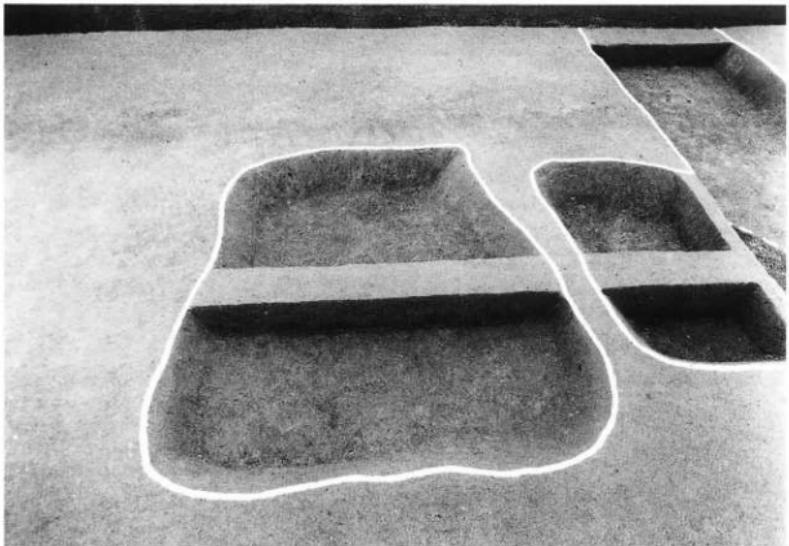
24-8 調査区 S E 12003・S E 12004検出状況（西から）



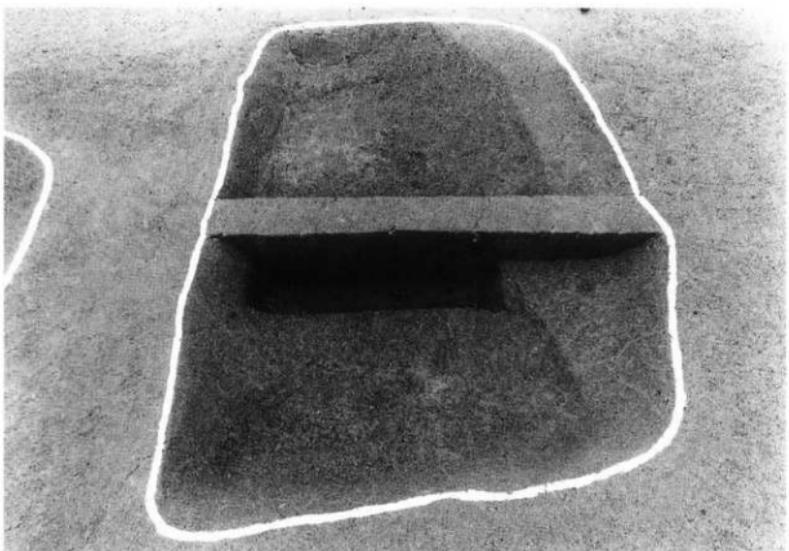
24—8 調査区 S E 12003検出状況（南から）



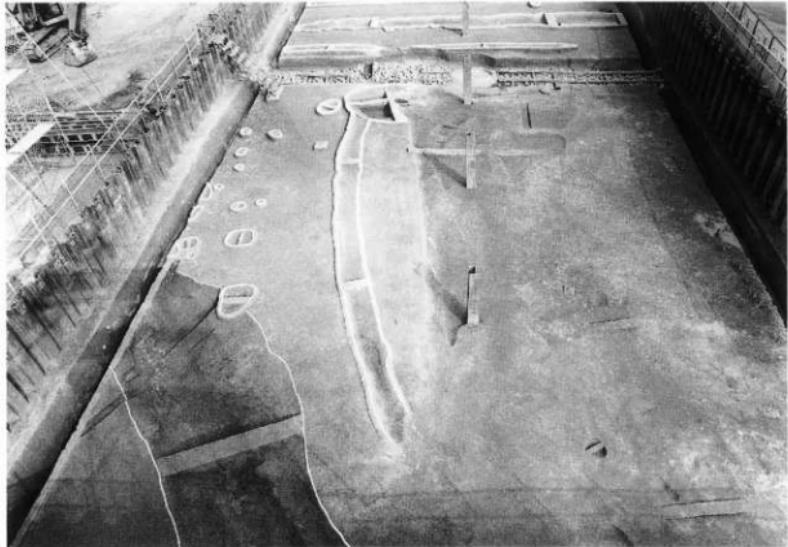
同上 断ち割り断面（南から）



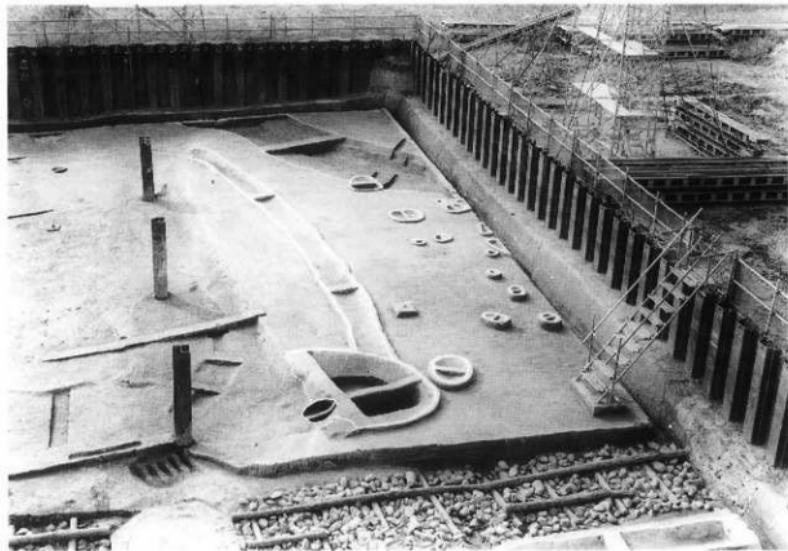
24-6 調査区 SK 12009検出状況（南から）



24-6 調査区 SK 12012検出状況（南から）



24-1 調査区 全景（西から）



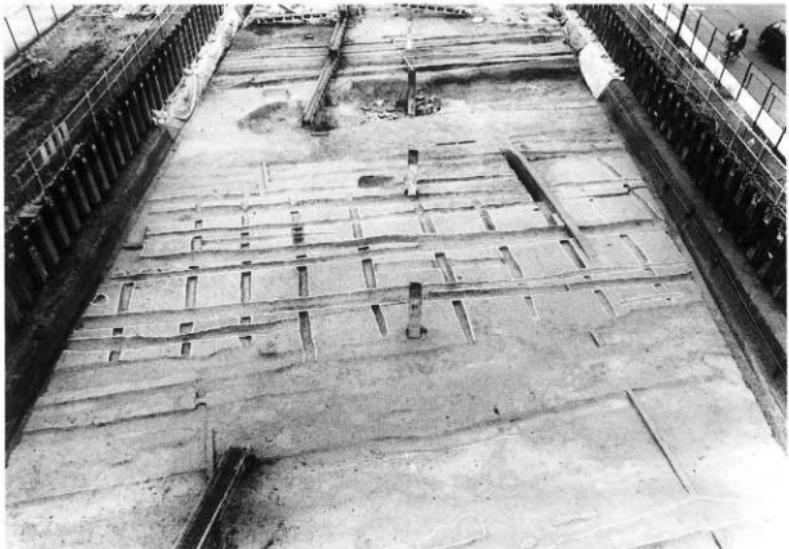
24-1 調査区 西部（東から）



24—2 調査区 全景 (上が北)



24—3 調査区 全景 (上が北)



24-4 調査区 全景(西から)



24-5 調査区 全景(上が北)



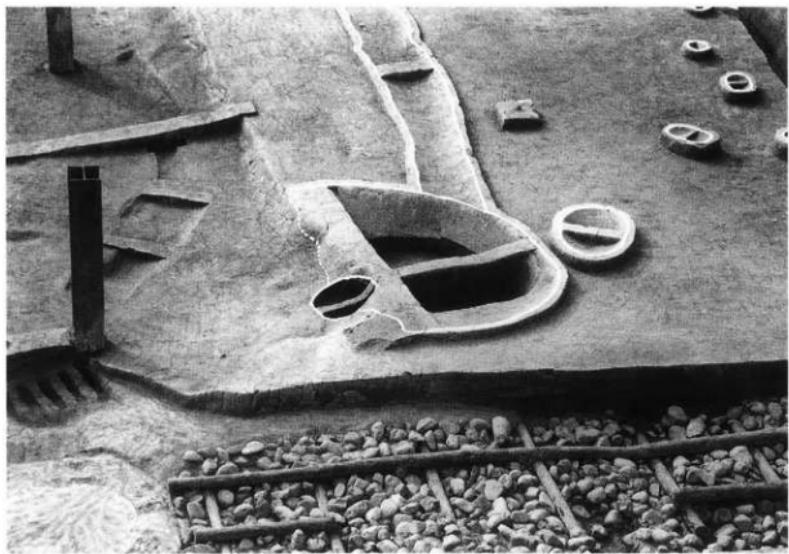
24-6 調査区 全景（上が北）



24-7 調査区 全景（西から）



24-8 調査区 全景（上が北）



24-1 調査区 SE 21001検出状況（東から）



24—3 調査区 S E 21002検出状況（南から）



同上 上部井戸側（南から）

図版一六（第2—1面）



24-3 調査区 S E21002 断ち割り断面（南から）



同上 完掘状況（南から）



24-3 調査区 S E21003断ち割り断面（南から）



同上 遺物出土状況（南から）